

---

# 獣の咆哮 -Roar-

sorapon

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

獣の咆哮 - Roar -

### 【Nコード】

N7139X

### 【作者名】

sorapon

### 【あらすじ】

研究機関や企業の実験を目的とした地方の新開発都市。人々はその街を『新都』と呼称し、多くの人が移り住んでいった。しかしその急な開発計画を快く思わない者たちもいた。彼らの名は反社会組織『Brutes』、その組織の末端である青年はとある雨の日に少女とであう。

e x t r a / 用語と要望があれば人物（前書き）

本編で解説の入れられなかった用語などに解説を入れておきます。  
読むも読まぬもあなた次第でござる。まだ出てない単語も解説した  
り。

随時追加予定。あくまで予定。

要望があれば書いていないところも解説いれます。

## extra / 用語と要望があれば人物

『 Brutes 』

\* / 約十年前に発足した組織、目的はレジスタンス的活動なのだが普段は自警団のような活動をしている。

人の為の活動のおかげで資金援助が多く、財政は大抵黒字というレジスタンスとしてはおかしな組織でもある。

保有する武器の数は多くはないが、研究者なども数名いるため、独自の武器もある。

また地下施設『アンダーパーク』を作り、行き場のない人を受け入れている。

現在の本拠地は下町団地の廃屋風の小さなビル。

『 新都 』

\* / 三十年前に議会で承認された『地方都市新改革法案』によって最初に開発された都市。

数ある改革案の中から研究所や企業の優先的發展を目的とし、開発されている。

三十年たった今も開発は続き、他にある開発都市8つの中でも一番近未来化が進んでいる。

しかし実際は独自の行政をしているため、貧富の差が激しく、富めるものは優遇され貧しい者は淘汰されるという、世紀末のような状況になっている。

それでも土地代が安いやら、最新の物が揃っているからという理由で人口は増え続けている。

中央には行政機能や最新の研究施設の集まった『行政タワー』が建っている。

『 20年前の大火災 』

\* / 新都中央付近の研究所の立ち並ぶ地区で起こった火災。

死者が数万人、怪我人は数千人に及んだ。

当時は誰かが中から火を放った、研究所で化け物が暴れたなどという証言もあったが、現在は事故とされている。

このときに南西から北北東までの中央研究所エリア（主な研究機関のある地帯）が全焼したため、当時の研究記録はほとんど残っていない。

『 アンダーパーク 』

\* / Brutesの本拠地地下に作られた巨大な地下施設。

元は機械などの開発や整備を目的にしていたが、人を受け入れ始めたことで居住施設になっていった。

現在の広さは全て合わせて下町団地を全て飲み込む程。

メインとなる区画から、細い通路を通って移動することができる。またメイン区画奥にはシャッターがあり、向こうの様子は不明になっている。

『 下町団地 』

\* / 新都の中でも最も外周部の南東辺りに位置する居住区。

元の開発される前の地方都市の様子が残ったままの区画で、古めのビルやアパートがある。新都の開発のおかげで土地代が安くなっている、新しく家が建てられている。

すこし離れた場所にマンションだらけの灰色団地があるが、そこらもこちらも意外に住んでいる人は少ない。

また人が少ないせいで碌に行政で整備してもらえず、地面にひびが入っている場所が多々ある。

『 ジョー・ケットン 』

\* / 約10年間放送され続けている実写ドラマ 『 green man 』の主人公。

散弾銃と一丁の拳銃だけで軍隊に突撃し、たった一人で倒してしまふアメリカンなヒーローで、何故か子供に人気がある。

殺人事件の犯人は彼の大ファンで、発売されているグッズを集めていた。

決めゼリフは「グツナイベイバー地獄で夢見な」

『 とりもち銃 』

\* / 5 t h e p i s o d e でアルムが使った銃。

アンダーパークの技術担当達がとある漫画をアイデアにおもしろ半分で作った結果、実用化してしまったアイテム。

粘着力は高いが数分しか持たず、ついでに濡れるとすぐにとれてしまふ。

e x t r a / 用語と要望があれば人物（後書き）

わからねーんだよさっさと解説しやがれ生ゴミ野郎！という意見がありましたらコメント欄でも

雨音。

叩きつけるような、滝の音を少し弱めたような、それでもなお強い雨音が響く。

その雨は光を反射して光はしない。

黒い、漆黒よりもなお黒い。

呪うような色、まるで引きずり込もうとするかのような深さで、

その黒い雨は降り続く。

時刻は夜。

街灯や家々から漏れる明かりだけが光源になるはずの、その時間。しかしそんな時でも、今日は昼のように明るい。

ふと気が付けば、サイレンの音。

そして遠く、灰色の、赤や青そして白い明かりに照らされるビルを中心に、誇るように立つ塔のような建造物。その傍らで、大きな炎が踊っている。

雨 色はおかしいが、それでも雨は降っているというのに、一切その炎が止まる気配はしない。

通りには多くの人が溢れている。

燃えているのは大きなビル地帯、研究所という小さな看板が見えることから、そう言った施設が集まる場所だったのだろう。

雨足が強まっても炎は消えず、次第に薬品が燃えているのだろうか、蛍光色の煙も吐き出し始めた。

予想外の大火災に慌てているのか、消防隊も手が回らないように見える。

「放水が足りない！もつと水回せ！科学班も真面目にやれ！」

「早く避難させろ！何してる巻き込まれるぞ！」

「また爆発だ、放水よりも被害の拡大を防げ！燃えるものを壊すか遠ざけるかしら！」

家族の名前を叫ぶ声や、恋人の所在を知って無く者の声が雨の夜に響いていく。

炎に照らされる中央の塔は、まるでアリを見下す人のように無表情に、ゆらゆらと輝いている。

雨。嵐という方がいかもしれない。

それほどまでに降っているというのに、地を流れるのはほんの少し。

アスファルトに当たった黒い雨は、染み込むこともなくはじけて消えていく。

少しだけ溜まった雨を引き伸ばすように、這いずる影がある。

街灯の明かりも届かないような、大きな路地の見える細く小汚い小路地。

あの火災から逃げ出したのか、服の裾や髪の一部が焼け焦げている。

焼けて袖のなくなった白いローブのような、囚人服にも見えるそれから覗く腕は擦り傷で赤く染まっている。

裸足のままアスファルトを走ったせいで、足の裏も血にまみれている。

顔立ちは少年のよう、年は恐らくまだ10かそこらの少年だろう。せき混じりの荒い呼吸を繰り返し、這いずり、四角いゴミ箱にどうにか寄りかかる。

空はまだ雨を吐き出している。

白い衣をまとった、黒髪の少年は、孤独さと神々しさを感ぜさせる。

細く長いまつ毛のかかる目を開くと、焦点の合わない目で明るい通りを見る。

黒い雨が降るそのさまがおかしかったのか、力のない笑みを浮かべると、うなだれるようにしてまた目を閉じる。

黒い雨は、吹き続ける。

街灯の下に、ひとつの影がある。

それは未だ慌ただしい炎の群れを見やると、少年のいる路地へ足を進める。

影、黒ではない、この雨と同じような色のコートで全身を覆うその様はまさに影。

フードから溢れ出るふた房の銀の髪を見なければ、誰もが霊か何かだと思い逃げ出すだろう。

影は足を止めると、真っ白い、日焼けを知らないような気色の悪いほどの白い肌の顔を、ちらりと露出させながら少年を見る。

表情は読み取ることができない。

少年は足音に目を開き、視線を合わせた。

「おまえ は 誰だ」

かすれた弱々しい声で、少年は問いかける。

影は答えず、街灯を背にして影を作るようにしながら、少年を見つめ続ける。

彼らの間には、まるで大火災が起こり慌てるモノたちの起こす騒音など、まったくくないような静けさがある。

時間にすれば数秒、一切の動きもない。彼らは見つめつた。

影に感情はなかった。少なくとも、読み取ることができない。

何故か少年は、散る際の花のような印象を影にうける。

もう一度、今度は先程の警戒心は無く、ただ興味を持って問いかける。

「お前は 誰、なんだ」

影がわずかに揺れる。

大通りを、大きな車両が走る。その明かりで、影の口元が見えた。わずかに、笑み。 試すような笑いだ。

慣れたような口調で、滑らかに答える。

「私は繋ぎ止めるための物だ。」

再びの静寂。

影の発した声は、凜とした女性を彷彿とさせる。しかし同じように、壊れた機械の発するノイズのようにも聞こえる。

人が発することが出来る限界のような声。

「再び会うことができた、再びあいまみえた。

君は知らない、しかし私は知っている。

それは繰り返してはない、『それ』は私そのものだから。」

理解のできない言葉を影は紡ぎ続ける。

通りでは、車の行き来が多くなってきた。

炎は未だ鎮火せず、雨も降り続けている。

少年は、引き込まれていた。彼女の黒に、そして言葉に。

「少年。」

呼びかけられる、言葉は一言。

少年は立ち上がるうとするが、傷だらけの体がそれを拒否する。

背をあずける箱が小さく音を立てて凹む。それを見てか、影は数

歩少年へ足を進め、彼へと手をさしのべる。

「少年、そして人の子よ。」

君は生きる意味を、生の約束を覚えているか？

その約束を刻んでいるか？」

少年は、影の顔を見た。

赤い瞳。

「それを知らぬのなら、探そう、探せ、探したまえ。それが生き

る答えとなるまで。

君に無いなら誰かに問え、誰かにないなら君が創れ。

生きる意味を差し出してくれ、答えが約束だ。」

少年は、影の瞳を見入る。

影の声は、声を発する毎に透き通ってゆく。

次に発する声は、人をもう一度超えた神々しさを内包する。

「始めよう探求の旅を。」

白くしなやかな手。雨の黒とはまた違うような、引き込まれる感

覚。

少年は抗わない。

傷だらけの、火傷が目立つ骨の浮き出た手で影の手をつかむ。

通りは静かだった。しかし炎は、雨は止まない。

炎に照らされる街を背に、焼けて朽ちる音を背景に、叩きつける  
雨を演出のように。

彼らは手を取り合った。そして、少年は立ち上がる。

衝撃、揺れで、影のフードが落ち、頭部が露になる。

それはまるで絵画のような光景だった。

闇に沈んだ白い衣の少年を、光を背にする銀の髪の聖女が手を伸  
ばし、導く。

旅は始まる。生の意味を知るために彼は立つ。

空へ。灰色の木の立つ荒野を発ち、黒き雨を吐く雲の向こう、果  
てない青の空へ。

旅は、始まる。

Prologue / 黒い雨の夜 「The Wings, to the

どうすればええんでしょうかね

刺すように照りつける夕日。

夕焼けの時刻。

そんな中、小さなビルの立ち並ぶ通りには雨が降り続けている。

空を見れば薄黒い雲が転々と。

「異常気象つてやつかな……」

傘もささずに、早足で進む青年がつぶやく。

雨にぬれた髪はそれでも跳ね返り、身を包むフード付きのロングコートは多少の水を弾いているが、さすがに少しシミが出来ている。狐の嫁入りだったか、自問自答のように呟き段々刻一刻と薄暗くなる街を歩く。

点々と設置されている、すでに汚れの目立つ街灯が照らす道。遠くには大きな雨雲が見える。すぐに大雨になるだろう。

台風の目のように一旦収まった雨足に感謝するように、青年は走り出そうとする。

そんな時だ。一瞬視界の端に何かがつつた。

普段なら目にも止めないだろう、ただ立っているだけの少女。

まじまじと見入るのはまずいだろう、そう思った青年は気にせず走り出す。

雨雲は思ったよりも早く動いている、このままだと降られてしまっただろう。すでに全身濡れているとはいえ、出来れば避けたい。

足を数歩回転させる、そして聞こえたのはどさり、と何かアスファルトに落ちる音。

青年は立ち止まる。

振り向く。

空を見ていた少女、美しい輝くような白銀の長髪が地面に広がり、うっすらと血が広がっている。

彼女の着ていた白い服が血を吸って、薄く染まる。

体を反転させ駆け寄る。

走りよって傍らに跪き、背に手を置く。

「大丈夫ですか!？」

心配しようなのか、お人好しなのだろう。

青年は少し焦ったような表情で、声を何度かかける。

とりあえず起こそう、そう思った青年は肩から体をひっくり返し、少女の体を抱える。

年頃の少女だからなのか、経験の少ない青年にはわからなかったが、柔らかな肌の感触が服越しに腕に絡む。

触られたくないだろう部位を触らぬよう気を付けながら、抱えた少女にもう一度声をかける。

すると薄く目を開けて、少女が弱々しい口調で言った。

「……助けて」

薄く開いた瞳からは、深い青色の瞳がのぞく。

顔色は青白い、今にも消えてしまいそうなほど弱っている。

「わかった」

青年はほとんど迷いなく、頷く。

「家は、どこ？」

「……無い」

無い、それはどういう意味だろうか。

家出少女という言葉が頭を過ぎるが、そんな雰囲気は感じない。

不思議な感覚と雰囲気、会ったことがないタイプだ、そう青年は思考する。

「じゃあ、ひとまず休めるところに行こう」

言つと青年は腰を上げ、少女を背に乗せる。

返事はない。

肯定したと受け取り、しっかりと背負い直す。

その時、再び雨が降り始めた。

運がない、今日に限って。

青年はそう思うが、それはどうしようもないことだ。

青年の住んでいるアパート、すこし古ぼけたその目の前。

部屋まで後数歩。

最も奥の、二階の角の部屋が青年の住む部屋だ。

目の前までたどり着き、鍵を差し込み回す。

208号室、そうかかれたプレートが扉に張り付けられている。

苔色の扉を開くと、アパートにしては広い玄関が視界に開ける。

靴を脱ぎ散らし、突き当たりの広い居間へ運ぶ。

「ベッドじゃなくてごめん」

そう言うのと、慎重に少女を茶色の安そうなソファに座らせ、体を支えながらゆっくりと横たわらせる。

洗濯し干したあとそのままだったらしい、部屋の端に置かれたタオルを二枚手に取る。

一枚で軽く自分を拭くと、もう一枚で少女の体を軽く拭いた。

出血は額を地面に打ち付けたせいのようなのだが、既に傷も塞がり少し跡が残るだけだ。

触っていいのか、今更ながらに戸惑う青年だが、このまま風邪をひかれるよりマシだと考えたのだろう、慎重な手つきで髪や腕を拭く。

水と血を吸った白い服　今は薄い桃色になっているが　は、さすがに脱がすのはまずいと思ってしまったのだろう、毛布をどこからか持ってきて、少女に覆わせるだけですませた。

改めて見ると、綺麗な顔立ちの少女だ。

大人らしさよりは、年頃の少女らしさが目立つ。まつ毛は細長く唇は薄い桃色。

耐性がなかったのか、顔を赤らめ青年は顔を背ける。

壁に張り付けられたモノクロ調の時計が、とん、とん、と時を刻む。

数分たったろうか、少女の向かいに座り込んだ青年は、少女が起き上がるのを見た。

顔色はこの短時間に、多少マシになっている。

大きな青い瞳が周囲を見回し、やがて青年の方で固定される。

「体は大丈夫？」

青年は立ち上がり、キッチンの方へ歩く。

インスタントのコーヒーを電気ポットのお湯で煎れ、可愛らしい白地にクローバーの装飾の入った、ティースプーンでかき混ぜながら少女に差し出す。

少女は不思議そうな目でカップを見つめ、受け取る。

カップの中では溶け残った粉末や泡が、渦を巻いて回っている。

それを無表情で見つめながら少女は、

「……ありがとう」

一言、感謝を口にする。

不器用な子なのだろう、青年は考える。

少女はコーヒーをゆっくりと口に含み、味わっている。

保護欲をそそられる光景だ。

気に入ったのか、コクコクとカップの中身を口に運ぶ。

カップの中身をまじまじと見つめながら、半分ほど飲んだ頃。

「……ごめんなさい」

突如誤ってくる。

沈黙。

「なんで謝るの、僕がやりたいからやったことだよ」

言ってから少しまずい言い方かもしれないと思ったが、既に遅い。

少女は特に気にすることなく、言葉をつなげる。

「迷惑、かけてしまったから」

「それこそ謝られる方が迷惑だよ」

「……でも」

少女の表情はあまり動かない、せいぜい目を開くか閉じるかくらいだ。

その感情の読み取れない顔で、少女は言う。  
青年は答える。

「さつきみたいに、ありがとうでいいんだよ」

「……うん、ありがとう」

青年はほほえみ返す。

ハンサムにしか許されない返事の仕方かもしれないが、青年のそれには不快感はなかった。

再び小さな沈黙が落ちる。

そして、こちらも再び口を開く。

「……お願いがあるの」

落ちていきそうな程深い青の瞳で、少女はこちらを見つめる。  
慣れてきていたのだろうが、これでまた顔を赤らめた青年は、早口で返事をする。

「な、なになかな」

本当に空白の、感情の見えない表情で彼女は言う。

「私を、助けて」

張り付けられた時計が、時を刻む。

変わらないのはそれだけだ。

沈黙が縫いつけられたような、広い居間。

先程まで湯気を立てていたカップからは、もう何も出ていない。

小さくコーヒーマシンの表面が波立ち、青年が少女に問いかける。

「助けてって、どういうこと……?」

「あなたには、経験があるように見える」  
経験。

「私も多くは知らないけれど、このままじゃ近いうち、大変なことになる」

少女は淡々と、言葉をつないでいく。

青年は気圧されて、何も言えなかった。

また少女が口を開いたとき、

「すみませーんっ、宇川宅急便ですー！いらっしゃいますかあー

」！

「ああ、今出ます！」

雰囲気破るように呼び鈴と呼び声。

少しごめん、と少女に言うつと青年は玄関へ向かう。

届いたのは少し大きめの箱、差出人のところは聞いたこともないような会社の名前が入っている。

リビングには戻らず、玄関で箱を開け中身を取り出す。

中には封筒が一つと、一回り小さな箱がもう一つ。

封筒には、差出人『Brutes』と、少し崩れた文字でかかれている。

封を切り、中身を取り出すと中には手紙。

宛名は無い。が、誰に宛ててのものかは考えずともわかる。

「そろそろお前が入って3年、会ってからは10年だ。

組織的にも時期的にも、お前に出張ってもらいたい。

一人が不安なら誰かペアを探して、明日の11時までにはビルへ来い。

待っている。

From Jens「suzumi」

少し崩れた字体で、書かれている。

ため息をつき、青年は封筒へ手紙を入れ、詰める。

がさがさと音を立てて、下にあった小さな箱を取りだすと、居間へ戻る。

「ごめんね」

「……」

表情に変わりはない。

何を想っているのだろうか。

青年は思考を整理する。

彼女は家が無いと言った、これは帰りたくないということかもし

れないが、事実はわからない。

次に、助けを求めた。どういう意味での助けかはわからない。そして、近いうちに大変なことになると。

（理解不能だよな……）

ひとまず聞くことにしたようで、青年は箱を傍らへ置くと、ソファに座り問いかける。

「二つ、聞きたいんだ。助けてってどういう意味、それと大変なことって？」

「二つ目は、それが起こるかもしれないことしかわからない」  
一度口を閉じる。

「助けて欲しいのは……私を、ここに置いて欲しい」  
啞然とした。

青年は目を見開き、硬直する。

「置いて欲しいって……家族は……」

「家は無いの」  
即答。

「で、でも置いて欲しいって……」

「迷惑なのはわかってる、でも、お願い」

抑揚のない声。しかし彼にはその声に込められた感情を感じられた。

道徳的な拒絶はこのさい無視をする。

廊下の扉の様子からも、生活感のない物があったことから住むことに問題はないのだろう。

青年は口を開く

「……せめて事情を教えて欲しい」

「……」

少し眉尻が下がる。迷っているのだろうか、言うことができないのか。

「もし家出とかだったら、置いておけない」

それはありえないだろうと、青年は思っていた。

この辺に、こんなに目立つ少女を娘に持つ人などいない。  
少女は、大きな掃き出し窓から覗く塔のような建造物と、青年を  
重ねるように見つめる。

何度目かの沈黙。

もう乱入者はない。

表情を変えない少女に、青年は、

「わかった」

一言、了承を告げる。

「……え」

少女の瞳が、大きく開かれ驚きを伝えている。

真剣な目で青年は少女を見る。

「けど、条件がある。明日の朝僕と一緒に来てくれ、それといつ  
でもいい、必ず事情を教えてください」

少女は小さく頷く。

青年は微笑み、

「とりあえず明日までここで寝ていて。」

立ち、廊下へと歩みゆく。

ぎ、と音を立てる扉を開け、少女の方を見、そして扉を閉めた。

少女は振り返らず、かけられた毛布をかき寄せる。

夕闇が街を包む。

玄関に置かれた大きな箱。

受取人の名前は、『しろみや白宮 かなめ要』と言った。

2nd episode / 畜生共「Brutes」(前書き)

解説の入らない用語が入ります。

用語集を読むか、雰囲気を感じ取ってください。

「名前、聞いてなかったね」

朝日が照らす道の上で、要かなめが少女に問いかける。

少女の背は、ちょうど要の肩に届く程度だ。

昨日の白い服の上から、黒いシャツを羽織っている。

相変わらず表情の読めない顔で、要を見上げている。

「名前……」

少女が少し俯き、立ち止まる。

彼らの周りは少し古い建物の立ち並ぶ、昔ながらに在る街並みのようだ。

手入れや整備がされていないのか、地面にはヒビ割れや雑草が目立つ。

昨日と同じ、黒いロングコートを着込んだ要は、体を半分振り返らせ立ち止まる。

距離は、手を伸ばしあえば届くほど。

太陽が射し、二人がつくる影が一瞬揺れたように見えた。

「アルム。そう呼ばれた。」

誰に、とは聞かなかった。

「わかった。じゃあ、アルム、行こうか」

二人は歩き出す。

行先には、その先には、天を刺すような高さの塔が見える。

\* \* \* \* \*

比較的新しい、しかし風化が始まっているのかとどこどことビビが見えるビル。

雑草が顔を出しているアスファルトの上で、強化ガラスの扉を開け入る。

廃墟のような物寂しい雰囲気、足音が悲しく反響する。

外からの明かりしかないとためか、薄暗いビルの中の階段を上がっていく。

コツ、コツ、コツ、と音が響き、とうとう3階につく。

3階の廊下へ出ると、これもまた薄暗い、生活感や人気のない道が続く。

右へ向かい最奥の扉の前へ来る。

要はアルムに、ここで待っていてくれ、と伝えたと扉をノックする。

装飾のない無骨な灰色の扉。

ノックの音が響くが、返事はない。

青年は腕を見やるが、そこにある時計は11時の10分前を指している。

(返事がないのは、入ってことだな)

金属の擦れる嫌な音を立てながら、扉がゆっくりと開く。

扉の中の部屋は比較的明るく、内装も寂しさよりは新しさを感じる。

それでも無骨な印象は拭えず、敷物もなく灰色の床が剥き出しだ。部屋の奥には大きな業務用の棚が両側に二つづつ、中央に大きな木の机があり、その後ろには横に広い窓がある。

そこに、四つの影が並んでいる。

皆、要には見覚えのある人々だ。

右奥、棚の前に立つ禿頭の巨漢がこちらを見る。

組んだ腕は着ている緑色の上着がはちきれそうなほどに太く、肌は浅黒い。

男らしく、黒人の血を感じさせる顔立ちだ。

「来たか」

口を開いたのは、中央の机に陣取る金髪の男だ。

鋭い目を隠すように、ティアドロップ型のレンズの小さなサングラスをかけている。

丈のあった軍服のようなデザイン、灰色に近い緑の上着を肩に羽織り中のタンクトップと肉体を露出させている。

「遅かったじゃないか」

「まだ、十分前ですよ」

口調は笑うようで、お調子者や道化者と言ったイメージを感じる。普通なら浮ついた男という印象だけが残るのだろうが、彼には何か惹きつけるモノを感じる。

カリスマ、というものだろうか。

腕を組み椅子にもたれかかり、ニヤけ顔で喋り続ける。

「まあ、座れや」

「椅子ないですけど」

「じゃあ始めるが、いいな？」

「座らなくていいならどうぞ、スズミ」  
要は疲れきった顔で返事を返す。

呼ばれた名前から、彼が荷物の差出人だったようだ。

よくよく見ると、かけられた上着に『J e n s』と彫られたネームプレートが付けられている。

「じゃあとりあえずこいつを。ヒナ」

「ちゃんと雛梨ひなりと呼んでください」

左奥の棚の前に立っていた、エプロンドレスを着た黒髪の女性机に寄り、スズミからファイルを受け取る。

肩に届かない程度のショートカット、顔立ちは凜としていて、クールな印象を抱く。

機械のよう、人形のように整っている顔。

彼女は要にファイルを手渡し、先程から立っている位置に戻る。

「これは？」

「手紙の件だよ、これからはお前にも色々やってもらおう」

ファイルの外側には何も書かれておらず、中に数枚資料が入って

いるだけだ。

「簡単にいえば、テストみたいなものだ。探偵の真似事をしてもらおう」

「探偵……？」

「ああ、オレらの敵対してるやつらは動かないんでな？」

言つて、スズミは机につき、勢い良く立ち上がる。

舞台役者のように身振りをいれながら、窓辺を行き来する。

「我らが組織ブルーティスは畜生共の集まりだ、しかし畜生に成り下がったのは政府の腐敗のせいだ！」

この新都は奴らの方針の表れだろう、地位の高い者は快適に、地位の低い人間はこんなボロい場所に押しやって！

地位無き人間が殺されても、犯されても政府の犬は動かない！

だから畜生共が、獣風情の群れが救うんだ。そのためにオレたちは立つた！」

声高らかに言つと、陽の射す窓を背にこちらを向く。

「だから、これからは奴らが手を差し伸べなかったモノたちを救うだけじゃない。

戦う、戦い、奴らに考えを改めさせる。

すでにほかの手は尽くした。しかし抗うための力はない、だから群れを作る。

強い人間を集め、兵器を手にして戦うんだ。

虐げられるのを終わりにするために」

演説のように言つ。

要には、正直には理解できない。

しかし、彼への恩を忘れはしない。だから要はここに来た。

「それで、俺を呼んだのか。」

「そのとおりだ。段階を踏んで行くためにも、直に言わないとな」

「なるほどね。で、戦いつてなんだよ」

この組織はレジスタンス、現政府の問題点を突きつけるモノたちだ。

同じような思想を持っていたり、現政府のせいで不利益を被っている企業や個人から資金提供を受けて、活動をしている。

しかし彼らは少し違い、今まで表立った行動で反抗してはこなかった。

変わりに、自警団のような活動　政府が動かない事件の解決や、生活に困った人の保護を行う。

そのおかげか資金や同調者が増え、待ちに待った決起をしようというわけだ。

「今まで十年以上活動して、手に入れた決定打は数えられる程度だ。だから襲撃をかけ、敵の弱みを手に入れる」

「それだけか？」

訝しげな顔で、要が問いかける。

「……やけに食いつくな」

少し困った顔をして、スズミは腕を組み答える。

「ああそのとおり、それだけじゃないんだよ。保護した奴、まあ弱ってたんでその場で死んじまったんだが……」

苦い、しかし無理をして笑うような顔をして、言葉をつなげる。

「近いうちに、大変なことが起こる。規模が20年前の大火災よりも大きい何かが起こる、そう必死に伝えてきた」

お前も事件は知ってるだろう、そう言うスズミの顔は苦いまま。

「それは、俺も聞いたよ」

「聞いた！？誰に……っ？」

「昨日女の子を拾ったんだ、その子の事で話もあつただけど、それを聞いたスズミはニヤニヤと笑い顔になり、

「へえ？女の子を無理やり家に連れ込むなんて……」

「無理やりじゃないっ！というか真面目に聞く気はあるのかっ！？」

焦って紅潮した顔で要は叫ぶ。

雰囲気壊れ、和やかな笑いが小さく響く。

そんな中、今まで一切口を出さなかった男が、口を開く。

「その少女というのは、どうした」

男にしては長い、肩甲骨の下まで届くワインレッドの髪を揺らして、問いかけてくる。

髪をオークバツクにしているため、一房垂れた前髪以外に顔を隠すものはない。

小さな瞳に、ほかの部分は日本人らしい感じのする造形。服は体に密着し、隠すようなデザインだ。

「どうしたって」

「そんなに焦るなよ、妹さんじゃねえよ絶対に」

「……………」

再び押し黙る男。

「ああ、話が途切れるなあ。ドルーもタツシユも向こうの部屋に行ってる」

「了解」「……………」

スズミに言われ、巨漢と長髪の二人は部屋の中の扉から別の部屋へ移って行く。

要はそちらを見やると、口を開く。

「えっと、それで拾った子なんだけど」

「全部了解だ」

即答する。

「え」

「行く当てがないんだろう？で、お前のもとに置いて欲しいって感じか」

「あ、うんそのとおりだ」

当てられた事に驚きを隠せないようで、要は呆然としている。

「それで、パートナーとして活動するの？」

「そのほうがいいなら、そうするよ」

「もちろんそのほうがいいさ、慢性的に人間が足りないんだから」

「でも、戦闘なんてできるかわからないよ」

「できないと決まったわけじゃない、それにできなくても知覚力

があれば問題ないさ」

そう言うと、元の話題に戻るが、と前置きし、

「探偵の真似事といったが、もっと危険かもしれない」

「危険？」

「ファイルを開け」

言われて、ファイルを開き資料に目を通す。

一枚目には大きく、連続殺人事件概要と書かれている。

「殺人事件なんて、聞いたことないけど」

「言つたる？ 新都の政府は動いてないって」

「つまり、隠蔽されてる？」

「そう、だからこれを解決したら、何かあるんじゃないかと思つてな」

つまるところ、隠蔽するほどの事件の犯人、そいつなら何かを知っているだろうという憶測だ。

わかった、そう言うと要はファイルを閉じて、

「どうにかやってみるよ」

そう言うと足音を立て、部屋を出ていった。

\*

\*

\*

\*

\*

「終わったよ」

その声をかけると、歩き出す。

昼になったせいか、廊下の中央付近はさらに暗くなっている。

気がつくとも横にアルムが駆け寄り見上げてくる。

何か言われたんじゃないのか、と瞳が語っている。

「大丈夫だよ、何も言われてない」

「それじゃ、連れてきた理由は……？」

続けて問いかけてくる。

「今から行くところ、もし家に居るんだとしても、関わることになるだろうしね」

協力してもらうことにもなるし、と心の中でつぶやく。小さく首をかしげるアルム。

来たときも通った階段を降り、一階へ着く。

アルムは周囲を見回し、壁に手を付く。

「……行くところって……ここじゃないの？」

「ここだよ、ちょっと来て」

アルムが立つ、階段のすぐ隣の壁際。

そのそば、壁と同じ材質でできた階段の裏側に鉄柵で作られた扉がある。

要は少し錆び付いたそれを慣れた手つきで開き、内側にもう一つあった、金属の扉を開く。

するとそこには、傾らかな地下への階段がある。

階段の上部には裸の電球が垂れている。

「ついてきて。まあ、迷うことはないけど」

そう言い、要は階段を降りる。

アルムも、不思議そうに壁や床を触りながらも降りる。

要は時々立ち止まりアルムの方を確認すると、再び同じ景色を降り、四回程踊り場を経由した頃に終着点が見えた。

階段の一番下、そこにある最後の鉄の扉を開く。

軋みを上げるそれをゆっくりと開く。

人の発する声や喧騒が聞こえる。

地下へ降りると、そこは広い空間だった。

今いるのは運搬や移動に使われる通路のようだ。

上のビルよりも新しく見える壁や床、かなりの高さの天井には蛍光灯が相当数つけられている。

下を見ると、テントのような四角い簡易住宅がいくつも点々と並び、人が談笑する姿や子供が駆け回る姿が多く見える。

「アンダーパーク、意味としては地下広場って所かな」

要は後ろを振り向き、片手を広げて言う。

先程よりもよほど大きな驚きを受けて、目を見開いて顔をあちらこちらに向けているアルム。

「行くところって、ここ……？」

大きく頷く。

「そう、見てもらいたかったんだ。少なくとも僕といるってことは、このこと関わらないことがなくなるってことだしね」

空間の奥には巨大な戦車のようなモノや、腕のような機械も見える。

さらに奥はシャッターのようなものに遮られている。

「政府に守ってもらえなかったり、研究所から逃げ出してきたりした人とか、やむを得ない事情で生きていけなくなった人を助けるんだ」

「助けてるって……」

「キミと同じだよ。こつちの場合は簡易住宅を提供して、労働の対価として生活の糧を渡してるってただけけど」

「労働？」

「向こうを見て」

要が指を指した方向は、先程の機械の群れ。

その機械たちの足元には、作業着を着た人々が様々な工具を手にもって動いている。

よく見ると、機械の上に登って何かを吹き付けている人もいる。

「ああやって工業用機械とかを整備してる人もいるし」

指差す方向を変える。

そこには数人単位で集まって、10m単位の小さな土のブロックの上で植物を育てている人がいる。

そのそばには、大きな荷物を台車に載せて運ぶ少女らしき影もある。

「あそこの人たちみたいに働いている人もいる」

「あんな子まで……」

「たしかにまだ学生のはずの子まで働かせてるのは、悪いかもしれないけどね」

「はは、と要は笑う。」

下に降りよう、と言って右の通路へ歩き出す。

「でも、望むなら外にある家とかに住むこともできるし、学校にも行けるんだ。ここに居るのは留まることを選択した人だけだよ」

「カナメも、望んであの家に？」

「僕の場合は、ちよつと事情があるけど。そうだね」

「事情……」

「悪いけど、それを聞きたいならそつちも教えてよ？」

挑発するような笑顔でアルムを見ながら、鉄製の階段を音を立てて降りる。

先程降りた階段の半分程度の長さで、地面に着く。

「下から見ると、また違った雰囲気でしょ？」

「……あつたかい？」

「そうだね、人が多いからかもしれない」

見回すと、下町のような人との関わりの深い町特有の雰囲気があ

る。  
作業場と家のある場所は完全に分かれて居るわけではないように、作業着姿の青年が友人と談笑している姿もちらほらと見える。

「ちよつとなら案内できるけど」

「そういったところで、要は周囲がざわついている事に気がつく。

不思議そうな顔で、先程まで作業員らしき集団が居た場所へ目を向けると、誰もいなくなっている。

何故、そう考えた直後、

「お兄ちゃん……」

「……んっ！」

「要だ！あいつが来たぞ！」 「捕らえる！引つ捕らえて味見の型だ！」 「農林係に渡すな！こつちに連れてこい！」

「カナちゃん久しぶりねえ元気してた？」 「金返すの忘れてた

けど別にいいよな!?」 「外はどうだった!」

「兄ちゃん!」 「今トマト盗んだ奴いたぞ! 捕まえとけ!」

「要さん、また来てくださったんですね!」

「彼女か! 彼女作ったのか!」 「要が色気づいたぞっ!」 「

アームの調子悪いんだ、見てくれ!」

人の波が二人を飲み込んだ。

\* \* \* \* \*

数分後、未だ波は収まらない。

悪化はしていない、さすがに冷静になったのか外側の人々は作業場に戻っていつている。

最初に飛び込んできた桃色の髪の少女はまだ要に抱きついている。

「うにゃー」

「うにゃーじゃないから、離れなさい」

口ではたしなめながらも、無理に剥がすのは躊躇っているのか両手が降参のポーズをとっている。

「カナメ、大人気だね」

「予想以上だよ……しばらく来てなかったから……かな」

軽く青ざめた顔で、両手を上げるさまはゾンビのようだ。

足元には何故か野菜や服が積まれている。

そろそろ飽きたのか、十分に甘えられたからか、胸にすがりついていた少女はひよいと飛び降りる。

長袖のオレンジのシャツに、オーバーオールを着ている。

両側にびよん、と飛び出すように髪をくくっているのが、可愛らしい。

満面の笑みを浮かべて、えへへと笑っている。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんっ!」

くるくると要の周りを回っている。

しつぽがあれば飛べるくらいに降っているだろう。

「ひ、久しぶり、佐奈恵」

「久しぶりっ、カナ兄ちゃん！」

頭をなでると、猫のように擦り付けてくる。

猫犬という単語を頭に過ぎらせる。

「サナ、そこまでにしとけ？」

「ソウタ、久しぶり」

そこへ赤髪の少年が声をかける。

年は大体高校生くらいだろう、幼さが残る顔立ちで、今どきに鼻

絆創膏をつけている。

以前聞いたときには、顔を打ったと言っていた。

颯太という名の少年は、頭を掻きながら、

「あー、久しぶりっすカナメ」

そう言うのと立ち去っていく。ただ挨拶したかっただけのようだ。

「カナ兄、こっちのおねえちゃんは誰？」

「ああ、僕の相棒予定の、アルムって姉ちゃんだ」

「おお！アルちゃん、よろしくー」

そう言うのと、両手を差し出す。

アルムはどうすればいいのかわからないようだが、同じく両手を

差し出すと、手を取り合う。

「おともだちーい」

「お友達……」

ほんわかとした空気が漏れ出していた。

要に群がっていた人はやりたいただけやったのか、既に誰もいなく

なっている。

苦笑しながらも嬉しそうに、要はため息を吐く。

「アルム」

「……………？」

「これが、来て欲しかった理由」

近寄り、佐奈恵の頭をなでると「また来るから、今日はお別れだ」という。

頷き手を振って走っていく佐奈恵を見送ると、アルムの方を向き告げる。

「キミがどこから来たのか、何があったのかは今聞かない。それでも、僕はキミを全面的に信じるよ、昨日僕が許した時点から、家族だと思ってるから」

そう言うのと、さすがにキザ過ぎたかなと呟き、顔を赤らめさせる。アルムは手に残るぬくもりを感じながら、そして俯きながら言う。

「……ごめんなさい」

「どうして謝るんだよって、昨日言ったよ？」

「事情を、話せないから……言える時が来たら、言うから……」

「わかってるよ、キミを信じるのは僕の勝手だ」

そう言うのと、ご飯でも食べに行こう、と、要はさっきたどってきた道を戻り始めた。

アルムも地下の町を見やり、そして早足で彼の背を追いかける。

ファミリーストラン『 Daddy friggus 』。  
お腹の出たハゲオヤジがマスコットの、局地的人気のレストランに二人は座っている。

テーブルの上にはコーヒーのカップが二つ、それにハンバーグとグラタンが入っていた皿が乗っている。

ちなみに、このレストランの名物は異常に美味しいグラタンと素晴らしく苦いコーヒーだ。

裏メニューは『山盛りきのこパスタの肉塊添え』。

癖なのか、要はスプーンでコーヒーをかき混ぜながらアルムを見つめる。

一方のアルムは難しい顔をして、両手で持つカップを口元でゆらゆらと揺らしている。

(そういえば確認、してなかったな)

ふと気がついたように、懐へ入れたファイルを取り出し、開く。

中身は思ったとおり薄く、資料は5枚だけだった。そのうち一枚は事件のあった場所の地図、そしてほかの二枚は事件のあった場所の写真が写っている。

事件の詳細が乗っているのは二枚だけだ。

しかし情報が少ないわけではなく、殺害方法や、殺害時刻、被害者の簡易プロフィールなど一応必要なものは、大抵書いてある。

「でもこれを解決しろって、無理難題だよな……」

少なくとも、要個人は推理の経験なんてない。

目の前で幸せそうに目を閉じてカップを傾ける少女も、多分ないだろう。

ため息を吐きながら、背もたれに体重をあずける。

ボックス型だから後ろに倒れる心配もない。

深呼吸して、考えを改める。

「よしっ、取り敢えず情報収集だ」

「運に身を任せるのもいい」

「出鼻をくじかないで……」

「コーヒーを飲み終えたアルムが口をはさむ。

しかし視線は要のコーヒーをさしている。

どうやら苦いものが気に入っているようだ。

「……飲む？」

アルムは目をキラキラと輝かせながら、「いいの!?!」、と目で問いかけてくる。

「の、飲みかけでいいならどうぞ……」

素早く手元にカップを引き寄せて、両手で持つ。

「ああ、関節キツスだな」とか「小動物チツクだな」などと思うが、これからのことを思うと要は憂鬱だった。

「スズミの言い方からして、できなかつたらアウト、だよなあ……」

何度目になるかわからないため息をつきながら、テーブルに頭を乗せる。

飲み終えて無表情に戻ったアルムが要を見下ろしている。

(そういえば、これからこの子を同居するんだよな)

そう思った瞬間、要の顔がうつすら紅潮する。

多少あったいやらしい考えを振り払い、身を乗り出す。

「ひ、必要なものはある!? 買いにいかないとか家にないかも」

「迷惑はかけられない、何もいらぬ」

手で制されて、ああそう、と納得せざるを得ない。

「それでも、女の子なんだし必要なものあるんじゃない?」

「……………」

考え込む。

きつと、迷惑と必要なものを天秤にかけているのだろう。

天秤から迷惑を取り除くために、もう一言追加する。

「ほら、これから相棒として手伝ってもらおうだし、迷惑なんて

ないよ」

そして、

「さつき地下で言ったのと同じ、労働の対価と思って」

「……わかった、ごめんなさい」

「だから、そういう時はありがとうだよ」

「……ありがとう」

「どういたしまして」

笑い、ファイルを懐に戻す。

「そろそろ行こうか」

そう言っただけで伝票を手に席を立つ。

アルムも頷き、席を立って要の後ろを歩き、レジまで行く。

\* \* \* \* \*

梅雨でもないのに、昨日に続き空模様があやしい。

午後に入って間もないというのに、街は薄暗くなっている。

アパート付近とは違い、家などよりもビルやマンションの目立つ街並みの中を早足で歩く。

天気の良いだろうか、人通りは少なく灰色のコンクリートの景色が、物寂しさを際立たせる。

アルムは空を見上げながらとくとくと歩いている。

冷たい風に、背の中頃まで届く銀の髪がなびく。

すでに彼女に必要な物は買い揃えたようで、要の両手にはポリ袋が吊るされている。

最初は一つづつ分けようとしたが、要が渡さなかったためだ。

歩き続けて五分ほど、雨は振らないが夜のような暗さになっている。

空は蓋のように黒い雲が覆い、太陽の位置さえわからない。

「早めに帰らないとね」

「……うん」

後ろ手に手を組んだアルムが、少し歩調を早める。  
使われていない建物が多いのか、周りのビルからは明かりが一切漏れていない。

昼。暗い夜道のような風景。

その景色に、突然何かが過ぎる。

「ッ！」

要が目を見開き、仰け反る。

先程まで頭のあった場所に、白い線が走る。

石の碎ける音と、碎けたそれが地面に落ちる音。

アルムは気づいていない、それを視認すると、要は足に全神経を注ぐ。

駆ける。彼女を脇に抱えて闇色の街を疾駆する。

アルムは驚いた様子だが、声も上げず抱えられている。

歩いていた通りを右に曲がり、直後に左折。

薄汚れた路地を抜けて、アパート近くの風景に出会う。

（家に戻ったらダメだ）

誰が狙われているのかわからない、そもそも襲撃者が誰なのかもわからない状況。

本来こんな経験のなさそうな要は、慣れた思考で次の手を決める。

（最初に俺を狙ったのはきつと俺を狙ったからだ）

状況証拠から敵の狙いを考える。

その間も止まらず走り続ける。

後ろから先ほどと同じ、白い閃光が飛び頬をかすめる。

一筋血の線が走り、少し先の石の壁が小さく陥没する。

スライディングのような体制まで体を沈めて、陥没したのと同じ壁を蹴り再加速する。

「アルム、先に走って家へ戻れ！」

これが正しいのかはわからない、そう考えながらもアルムに荷物

と鍵を握らせる。

背の高いマンションが立ち並ぶ地帯、そこに入ってすぐに要は右へ飛び、アルムを左側へ放る。

アルムもお尻から地面に落ち、すぐに立ち上がると逆へ走り出す。先程よりもさらに早い、陸上選手よりは遅くとも一般人にしては異常な速さで走る。

要の予想通りだったのか、先程までの三倍の閃光が後ろから飛んでくる。

「てめえは誰だっ！」

先程壁を蹴った時と同じようにしながら、マンションの壁を蹴り加速。

走る道の先には駐車場、つまり行き止まりしかない。

額から汗を流しながら、その中へ飛び込むと数台しかない車の中でも、車体の大きいモノの影に隠れる。

幽鬼のようにゆらりと姿を表したのは、モデルガンを手にした男。あれだけの距離を走ったため、肩で息をしている。しかしその顔は愉悦で歪み、不気味だ。

おおよそ普通の大学生のような服装をしていて、運動に向けた体型とも言にくい。

しかし、要にはとある思考があった。

殺人事件のファイル、その中の被害者の死因。

まるで銃で撃ち抜かれたような、しかしそれにしては綺麗に貫通している銃痕。

鋭いピックか何かでやれば出来るかもしれない、と書かれたそれは、今日の前にいる者が撃ち放った閃光ならば可能に思える。

「どういう原理だよ……」

ぼそりと呟き、出方を伺う。

魂が抜けたようなゆらゆらとした動きで、男は駐車場の中心を回っている。

「うひひい……うひっ……どこですか……」

不気味な笑い、息が上がっているせいか途切れ途切れなのが逆に不気味だ。

くるくると円をかくように回り続ける、推定犯人。

「ボオクが鬼なんだから……捕まってくれないと……」

時折見える目は虚ろで、死んだ魚のよう。

力なく下げられた両腕が振り子のように揺れている。

観察していると、突然動きを止める。

揺れていた体も腕も動きを止め、右手にさげていたモデルガンを狙いを定めるように上げる。

「みいつけた？」

奇妙な口調で言うと、モデルガンのトリガーを何度も引き絞る。

すると、モデルガンの銃口が淡く何度も光る。

そして一瞬の間。

もう一度トリガーを男が引き絞ると、散弾銃のように先程の閃光が弾けて飛んでゆく。

要からよく見える位置にあった、赤い車が閃光に撃ち抜かれ、ポコポコと凹む。

もう一度同じ行程を、引き絞るのを一度づつにした男が行い、再度閃光が走ると、赤い車は限界を迎えた。

轟音と、熱風。

全身を車に晒していた要は、顔を腕で覆うが防ぎきることはできない。

幸い破片がこちらに飛んできてくることはなかったが、軽いやけどを負った。

その時、カランと何か近く落ちる。

「あれえあれえあれえあれえあれえあれえあれえあれえあれえあれえあれ？」

狂った喋る人形のように頭をガクガクと左右に揺らしながら、

「間違いかあ間違いかあ失敗だなあ次は当てるぞあ？」

口の端からよだれを漏らし、片目を限界まで開けて言う。

熱風や弾丸のように飛ぶ破片など気にしないように、突っ立っている。

しかしそんなことよりも、要は理解不能な事に頭を囚われていた。かちり、と男がまたトリガーを引き、光が集まる。現実になんかことが起こっているというのが、要の許容できる理解量を超えている。

熱風を浴びたせいで、男の肌は爬虫類のようにデコボコになっている。気味が悪い。

地面に向けたまま、男はカチカチカチカチと何度も光を放ち、笑っている。

閃光を暴れさせる男を見ながらも、先程落ちてきた何かを広いズボンのポケットへ滑り込ませる。

男の足元が抉れて歩けそうにもなくなつてゆく。

閃光を放つとき、それそのものに音はない。トリガーを引く音と、地面を穿つ音だけが何度も響く。

やがて飽きたのか、男は笑いをやめる。

「出てこないよ、あの女の子をやるよ？」

青ざめた。全部わかつているのか、もしかすると、ここにいることも本当はわかつているのではないか。

苛立つようにトリガーを引き、最後に一撃を地面へ撃ち込むと男は駐車場を出ていく。

冷や汗を垂らしながら、要はその場に崩れ落ちた。

\* \* \* \* \*

部屋に戻ると、アルムが居間で座っていた。なんだったのか、と視線で問いかけてくる。

「僕もわからないよ」

言いながらコートを壁に掛け、向かいに座る。机の上に事件概要のファイルを乗せて開く。

向かいに座るアルムが不思議そうな顔をしている。要は事件のあった場所を記した地図を開くと、説明するように指で指し示しながら話す。

「さつき店で見たときも少し気になっていたんだ」

口で言いながら、点を線で結ぶようになぞる。

「事件の大半がある場所から半径2 km以内で起こってる、それに被害者が倒れてたところが似てるんだ」

もう一枚の、現場写真の載った資料を出す。

「よく見ると場所は違うけど、大体が行き止まりなんだよ。現場周辺情報があるモノには大抵、走った形跡があるって書いてあるしね」

もう一度地図を指して、

「さつきと同じように、多分おいかっこをしたんだろう。猟奇的な犯人によくあるらしいゲーム感覚の殺人かな」

要が顔をあげてアルムの顔を伺うが、特に変わることなく表情は読めない。

指し示したとおり、事件は円を書くように起こっている。大体の現場が密度の高い住宅街などだ。しかしその事件の場所を示すマーカーの中で一つ、ほかと外れて示されたものがある。アルムはそれを指さして問う。

「これは、どうなの?」

「え?」

それは一つだけ、マーカーで描かれた円の中心に近い場所に示されている。

「これは……」

声を漏らしながら、概要の書かれた紙を見る。

書かれているのは、その場所が最初の事件だと思われること、被害者はマンションに住む大学生の女性ということ。そして、事件が

雨の日に起こったということ。

また、その事件には目撃者が多く、このときは警察も動いていたことが他の事件よりも細かく記載されている。

「最初の犯行は突発的に行なって、他の事件は計画的に行なっている……？」

「それはわからないけど」

アルムが口を挟むが、どのみち考えてもわかりはしない。

考えても仕方がないとばかりにファイルを閉じると、アルムに呼びかける。

「一応使える部屋があるから、今日からはそこを使って。荷物は運ぶよ」

言って袋を片手に下げると、先導して行く。

廊下を出てすぐ左にある茶色い扉を開き、中へ入る。アルムもそれに続く。

中には清潔に保たれたベッドと、棚とテーブルが置かれている。床は少し埃を被っているが、充分使える程度だ。

荷物を中のテーブルへ置くと要は出てゆく。

「部屋は壁を壊さなきゃ何してもいいよ、居間に置いてあるものも適当に使って」

扉が閉められる。アルムは荷物を手にとって、首をかしげた。

\* \* \* \* \*

要は部屋へ戻ると、机に向かう。

「女の子が必要なものなんてわからないけど、適当に買い与えたのはまずかったかな？」

頭を抱えてぶつぶつと呟く。実際に、アルムに渡した荷物は全て要が適当に選び、買ったものだ。理由は簡単、アルムがわからない

と言って選ばなかったから。

ひとしきり眩くと気が済んだのか、ベッドに寝転び、先程アルムに説明していたことを口に出して考える。

「そういえば」

言っが早い、ズボンのポケットへ手をいれ、何かを取り出す。

「無意識に何だか拾っちゃったんだよな……」

指で挟み眺めるのは銀色の弾丸のような、軽い金属の塊。専門的な知識も、ましてや見て触っただけでそれが何なのかわかるはずもなく、これが何なのか要にはわからない。

弾丸の先端はひしゃげて、円柱状になっている。

「でも、これが閃光になるなんて思えないよな」

魔法か超能力でもない限り、と考える。実際にあるかもしれないとも、そんなことはありえないとも。

気が付けば、眠っていた。

3rd episode / 狂光 「the hierophant」

早く戦闘シーン書きたい。

深夜。

月明かりに照らされる男がいた。

小さな部屋からあふれるほどに、黒光りする物が敷き詰められている。

床は一人が何とか通れる程度の隙間以外埋めつくされ、壁も窓際もポスターや吊られたそれで元の部分がほとんど見られない。

浮かぶ顔は狂ったように笑みを浮かべ歪んでいる。

両手で一丁の拳銃を弄び笑っている。

「くひっ」

全身を揺るわせる。

天井には戦争を連想させる絵が敷き詰められ、そのうちの一枚は年季が入ったようにくすんでいる。

窓から覗く月は少し欠けている。

明日は、満月だろう。

\* \* \* \* \*

同刻。

ライトスタンドに照らされる机の前に要は座っている。

置かれた小さな置時計は深夜の1時を指している。

肌寒い夜に、黒い長袖のシャツを着込んだ彼の手元、スタンドの照らす机の中心には真新しい木の箱が置かれている。

それは先日、時刻も考えると一昨日の夕刻に届いた荷物に入っていたものだ。

スズミがモノを寄越すときは大事になってから使え、そう暗に言

われている気がした要は今までこれを開けなかった。  
すっかりとした手つきで、箱の全面についた質素な金色の金具を外す。

「ばちん、と弾けるように金具が外れると小さく隙間ができる。指を引っ掛けて箱の上部を開けると中には布が敷き詰められている。

何かを包んでいる布を箱から取り出し、机の上に置く。

端を持ち、丁寧に開いてゆく。

ライトに照らされる顔が僅かにゆらぐ。

視線の先、布の上に包まれていた物。

それは手甲、西洋のガントレットのようにも見えるがそれにしては隙間が多く、動きやすそうになっている。

黒い手首まで覆う手袋に、金属の厚い板を動きを阻害しないように縫いつけた、いや溶接したように見える。

手の稼働部や端には板が付けられていない。

箱の中に残った小さな二つ折りの紙を手に取り開く。

新素材防刃防弾完備手甲『マニファ』

紙にはその一文だけが書かれている。

「相変わらずネーミングセンスねえの……」

苦笑しながら紙を戻し手甲を手取る。想像以上に軽いが、確かな金属の重みを感じる。

右手にはめてみると、ゴムのような弾性素材も組み込んであるのか、腕の部分を軽く締め付ける。

手のひらには布だけなので、装甲と言うには弱い気がする。しかし要が試しに机の上のカッターを押し付けると、全く切れる様子がない。

「新素材って……ちゃんと何なのか書いておいてくれよ……」

言いながらもうまく動くか試し続ける。手袋を付けた時の不自由さも、気にならない程度に抑えられている。

大きさもうまくやればコートの中へ入れられる程だ。その辺も考えたのだろうか。

ひとしきり試したところで、元の布の上に戻す。

何かに気づいたような表情。彼はスタンドのライトを消す。

夜が更ける……………。

\* \* \* \* \*

\* \* \* \* \*

冷たい。

誰もがそう感じるであろう光景。

いつさいの有機物のない、完全な管理施設。

白に近い機械的な印象を受ける灰色の通路、壁や床には近未来的な緑に光る線が走り、時折信号を贈るように点滅する。

その通路を一人の男が歩いている。

男というよりも、道化師と呼ぶほうがいいかもしれない。

全身を蒼と紅の二色でデザインしている。顔には白に小さく緑のラインを入れた。ちようどこの通路のような。仮面を付けている。帽子から溢れている髪はオレンジ色をしている。

あまりにも似合わないその光景。

道化師はこれもまた近未来的な扉の前で立ち止まると、センサーが感知する音と共に開いた扉の中へ入る。

「おや、全員揃っているのかい？」

道化師はくぐもった声で笑う。

部屋は扇のような形をしていて、窓からは星空と明るい街並みが覗ける。

「そんなわけがなからう、一人は研究職なのだし一人は部隊員だ

ぞ

弧にそうように設置された机の上に座る男が答える。

部屋に明かりはなく、外から射し込む光だけが二人を照らしている。男の表情は見えない。

道化師がアハハハと声を上げて笑うと、腰に手を当て芝居がかった動きをしながら答える。

「そうだよねえ、ボクも揃うはず無いと思うよ。ところで彼女はどこにいるんだい」

「彼女なら上だ」

「上……………ああなるほどね、また登ってるのかい」

机に座る男は手にした棒を漫画の侍のようにまっすぐ伸ばす。

「いつだって何かを見ているよ、彼女は」  
外を見るために横を向く。

光で照らされ見える顔は、縦に長く鼻の高い西洋系の顔立ちだが、どことなく和風といった風貌。

「俺達の時も、そうだったろう」

街の明かりで浮かぶシルエット。

彼らが語る部屋のはるか上、先端に影が立っている。

顔には道化師と同じようなデザインの白黒の仮面を付け、夜空に白く輝く髪をなびかせる。

黒いローブのような衣装を纏うその姿が人の目につくことはないだろう。街並みは遠く眼下にある。

しかし”それ”は、何か一つを見つめるように一点に視線を合わせ動かさない。

風が強く吹き猛獣の唸り声のように聞こえる。雲はほとんどない、美しい星空。

今まで動かなかった影が、腕を振る。

露出した手に巻かれた鎖が音を立てる。

前へ出した手を、何かに掲げるようにする。

「ヒトの子、獣の孫が鼓動を立て始めた」

あまりにクリアな声、透き通りそのまま消えてゆくような声で影は歌うように言う。

「始まりは月の夜、蒼が闇色に染まるとき始まりは告げられる」  
風が吹き、小さな雲が流れる。

再び屋内。窓際に移動した道化師は星空を眺めている。

「キレイだなあ、そう思わないかい？」

「生憎、大して興味はない」

「興味があるのは街の方かな？」

興味がないといいつつも長髪の男は空を見る。

星空と街の明かりに淡く照らされ、道化師と侍は空を見る。

「こりゃあ明日は晴れかな？」

「満月の夜だ、晴れた方がいいさ」

空にはオリオンが輝く。

夜は更け、明るい街も静寂に包まれていく。

道化師が、楽しそうに笑う。

「満月の夜は、うるさくなりそうだねえ？」

太陽が西に傾きだし、影が伸びる頃。

朝から出かけていた要とアルムは今、新都外周の住宅街の中でも一際静かな、人の気配の無い障害物の多い公園に立っている。

公園と言っても、子供たちが遊ぶような場所ではなく、資材置き場に近いものだ。

遊具のようなものもあるが、大きな柱や板があちらこちらに置いてあるせいで遊びにくいのだろう。

何かを確認するように二人は歩く。

アルムは両手に乗せると少しあまるくらいの大きさの、黒い布にくるまれたモノを抱えている。

「本当にできるの」

「……できるはずだよ」

自身があるのかなのか、少しの間を開けて要は答える。

「昨日一瞬見せた冷静な顔、あれが無いなら捕まえられる」

「……」

「あいつが思ったとおりの奴なら問題はないよ、説明したとおりになるはずだ」

立ち止まり、振り返るとアルムの抱える布に目をやる。

アルムもそれに目を落とすしっつ。

要はまた前を向くと、そばの壁に立てかけられていた大きな板を手取る。

「さあ、ちょっとだけ準備しようか」

\* \* \* \* \*

茜色の空の下を幽鬼のようにふらふらと歩く男が居る。

背には二丁の銃を背負い、手には一丁の拳銃。

さまようように背の高い壁の並ぶ住宅街を歩いている。

片目は限界まで開かれ、瞳孔も開いている。口の端からはヨダレがたれ、腕は力なく下がりがり不気味だ。

その男の前に一人の、黒いコートの青年が現れる。

(獲物だ)

瞬間的に、いや、本能でそう感じた男は手にした銃を青年に向けてる。

理性など擦り切れてほとんど残っていない。

トリガーを、引いた。

要の後ろで男が狙いをつける。

しかし力チリという音を聞いても、要は焦る様子を見せない。

出てきた道にもどるように二回右折すると、立ち止まる。

後ろの男が銃口に光を貯めている拳銃を、要の頭に照準をあわせて止める。

影が伸びてゆく。

遠くに走る車の音や、人の喧騒だけが聞こえる音の全て。

沈黙を破るように、男の指が動き始める。

そして、トリガーが引かれる瞬間、要は走り出した。

白い閃光が放たれる。

「うひっうひっうひっ」

走る速度とリズムに合わせるように不気味に笑う男。

地理に詳しいわけではないのか、ただ要の背だけを追ってくる。

昨日のように、沈黙しながら追ってくる無言の追人ではない。

左折、右に曲がるように見せかけて直進、右折、左。

そうやって追いつかれないよう、撒くようにしながら走り続ける。

五分程、昨日よりも速度は遅いが長時間の走りに肩で息をしている。

数えられない程曲がり、折れ、走った。

そして最後、昨日と同じ潜り込むような体制で加速すると、大きな石の壁を蹴り左へ飛ぶ。

昨日の再現のように石の壁にいくつもの弾痕や陥没した後が残り、その前を人影が走り抜ける。

石の色が一面に広がっていた道から、土の広がる広場へ飛び出る。昨日と同じように動き、一番大きな石で作られたぞうの滑り台へ身を隠す。

大きな板が脇に立てかけられた、広場の入口から遅れて男が駆け込んでくる。

「今度は逃がさないですよ」

記憶はあったのか、先程の狂気に満ちた表情は消え、昨日の最後に見たような顔でクツクツと笑いながら。

拳銃をポケットに入れながらも一つ一つの手で、背に背負ったアサルトライフルのようなモノを手に取る。

「これはですねえ使い勝手のいい超超超有名なM16の精巧なレプリカなんですよ見てくださいこのラインこの硬さこの滑らかなグリップ！」

早口でまくし立てるが、要には理解できないものだったし、詳しい用語を使っていないことから大したマニアでもないように思える。しかし狂ったように矢継ぎ早に言葉を繰り返す男は、とにかく気味が悪かった。

隠れたままで声を上げる。

「お前が、最近起きてる殺人事件の犯人だな？」

ずつとぶつぶつと銃への賛美を繰り返していた男は、声にハツと我に帰ったように見えたが、またすぐに奇妙な表情に変わる。

「事件？犯人？ボクは何もしてないよ？おいかけっこと銃の試し打ちをしていただけさ？」

今度は語尾が上がっている。表情は先程より少しましに見える。昨日の火傷跡も合わさって化け物のようにも見える。

「でもそれで殺したんだろ？」

「頭をちよつと撃っただけだよ、死んだかなんて知らない」

会話は成立している。完全に狂った殺人狂ではないと考えた要は言葉をつなく。

「今から出る所に出ろ、そうすれば何もせずに済む。時間が経てばまた好きなようにおもちゃで遊べるさ」

まだまともだと思っていた要の予想は、大きく外れた。

男の体が一瞬何かに叩かれたように揺れる。

走っていた時のように目を見開き口から唾液を漏らし出すと、銃口に光が集まり出す。

口から唾液を垂らしながら、げらげらと笑う。

「わかったわかったわかったわかったわかったわかったわかったわかったよお！」

アサルトライフルを似合わないが兵隊の真似事のように構えると、唾液を飲み込んで叫ぶ。

「そうだねえ！追いかけてこの続きをしよう！」

笑いながら銃を滑り台へ向け、トリガーを引き絞る。

すると拳銃の時とは違い、連続して大量の閃光。

いや、閃光ではなく白く輝く細い弾丸が石の滑り台を削っていく。

「そこにいるのはわかったよおおお！早く別の場所に隠れようね？」

おかしな発音で叫ぶ。

（このままここにいたらまずいっ）

そう考えた要は、機を伺う。

数秒間続いた銃撃は、突如止む。

「あれえ？」首をひねり、「ああ、リロードだ？」

そうわざわざ大声で言うと、下部のマガジンを外すと、奇妙な声で「りろお〜ど」と言うと、また同じものを同じようにはめる。

何をしているのかと要が小さく見ると、再び銃撃が始まる。

「あんなりロードありなのかつ!？」

まるつきり物理法則もそもそも常識も無視したそれに、さすがに悪態を付く。

とにかくあれを落とす、そう決めた要は銃撃が止むのを待つ。

数秒後、予想通り途切れた銃撃の合間を縫い要は男に接近する。

高い瞬発力で一気に接近すると、手元に一撃を入れて銃を奪い取る。

「ああっ!」

甲高い声で叫ぶとおもちゃを取られた子供のような目で睨みつける。

要は銃を後ろに放りつかつかと近づぐ。

「もう一度だけ聞くぞ、自首するか、痛めつけられて捕まるか」

「う、うわあっ!」

話を聞く頭もないようで、男は叫びながら背負うもう一つの銃を手に取り発砲する。

近寄り、銃を奪って油断していた要は真正面からそれを食らう。

先程までのものとは違い、玩具らしさが出ているそれはまさに散弾銃といった形状をしている。

散らばるように弾けた閃光をモ口に食らった要は、後ろに吹き飛ばす。

「うわうわうわうわ……ひゃ?」

危機を脱したことが分かったのか顔から恐怖が消え狂気が戻る。

先程までよりも大きく口を歪ませてひゃひゃと笑う。

胸部に大量の攻撃を受けた要は咳き込みながらも、大きな四角い柱の影に隠れる。

咳き込みながらも、要は冷静に分析する。

「やつぱり……」

大量に食らったとはいえ、多少距離があつたのでせいぜい半分程度しかくらっていないため、普通に動けたのだらう。

それでもノーガードに入ったダメージは大きく、胸を抑えて痛みを堪えている。

「うひゃひゃひゃっひゃ、悪者に一撃をいれたぞおう！」

今は両目共に大きく開いている。男は散弾銃を構えたままで赤くそまる空に向かい笑っている。

空にはまだ薄く見えにくい満月がたしかに登っている。

要は自分の胸を叩き一喝する。油断してあんなことを言わなければさつきで終わっていた。

要は懐に手を入れ、昨夜の手甲を取り出す。

継ぎ目の部分で二つ折りにしたそれを取り出し、両手にはめる。

あの銃撃を近距離で食らいつつも動けたのは、これを急所である胸部に入れていたからかもしれない。

下腕の真ん中の当たりまで覆う手甲をつけて、敵の様子を伺う。

さすがにあの状態でも、無様を晒して隠れる標的を見失いはしないらしく、こちらに照準を合わせている。

「出て出て来てよお？」

時折遊ぶように撃ちながら、笑う。

要は意を決したように立ち上がると、銃声が聞こえた直後隣の柱へ飛ぶ。

飛び込んだ直後にもう一度銃声。

「連射なのかっ!？」

知識の少ない要は驚いたように声を上げる。

「その通りだおお、ボクらのヒイロオー”ジョー・ケットン”が13話で敵兵の群れに突撃した時の銃さあ!10連射ができてリロードも一瞬!」

誇らしげに語るその姿はまるで子供のようだ。

つらつらと言葉を並べながら、叫ぶようにしてこちらに歩いてくる。

もちろん銃口はそらさない。

さらにまずいことに、こちらの方角には投げ捨てたアサルトライ

フルの模造品が転がっている。

隠れていたらやられるだけだ、そう考え息を整える。

手甲、グローブに包まれた手を地面につけて簡易的なクラウチングスタートのような構えを取る。

走り出すよりも、飛ぶためのカタパルトの体制。

体が柱から出ないように気を付け。

「そろそろ出てこようよ、つまらないよ？」

奴の銃口に今までにないほど大きな光が溜まり出す。

柱の間を歩きながら、銃口に収まらない程の光量をこちらに向けている。

拡大が止まる。足に力を込める。

「グナイベイビー！」

閃光が、極太のビームのような大きさの光の奔流が広がるようにして柱を喰らい尽くす。

轟音、昨日の車の爆発よりも小さいが、大きな音が鳴る。

地面を抉り、男の前方10m程を削り取った所で光は消える。

薄く土煙が立ち上る。

「いえっす！うひゃひゃっ、ワンキルだぜえ？」

歪んだ顔で小さくあばれまわる。すると抉られた地面の上に落ちたつぶのような物が一瞬、キラリと光る。

瞬間、黒い影が躍り出た。

驚愕で限界まで開かれている目が、端の肉が千切るのではと思うほどさらに開かれる。

「うひいっ」

惨めに声を上げながら二発、三発銃を放つ。

弱々しい光を放ちながら飛ぶそれは、散弾銃だと言つのにひとつも狙った場所へ飛ばずに落ちる。

黒い瞳が、狙いを定めるように輝く。

対抗するように、男もヨダレを大きく開いた口からこぼしながら素早く銃を向ける。

刹那の交差。

時が止まったように思える空間の中。

駆け抜け、足の裏の数ミリ後ろを銃弾が踊る。

視線の交差。男は要を見失い、視線を迷子のようにさまよわせる。その間も止めることなく指を、手を動かしあちこちに光をばらまく。

「ひいあああうひあああ！」

奇怪な叫びを上げながら、銃を放ちながら突然走り出す。

飛び込むようにして手にしたのは捨てられたアサルトライフル。

それを片手に持つと、両手で構えて叫ぶ。

「出てこい！出てこいよ出てこいこいこいこいこいこいあひやはあはあひやはひやはひゃっ」

両手で銃を撃ちながらゲラゲラと言葉を忘れたように笑う。

土煙が完全に晴れると、要は柱の影からまた躍り出る。

銃撃、しかし狙いをつけることもなく放たれたそれを寸前でなんとか回避する。

真正面に、銃弾の嵐。

身をひねりよけるが、それでも数発喰らい、後ろへ転がされさらに追撃を喰らう。

転がりながらまた別の柱へ。

血の流れる頬や額を拭う。

手の手甲を見て、握り込むともう一度。

今度も狙いは定まっておらず、しかし止むことのない銃撃。

上。下。右に左。前だけでなく後ろ。上から降るように下から潜り込むように。

円を描くように走りよける。

先ほどと同じように一気に突きこまない。

先読みして撃たれた数発が頭へ飛ぶ。

一閃、金属がぶつかり合う音がいくつも響く。

振り払った裏拳、払った先にキラキラと夕日を反射しながら金属

の球が舞う。

倒れ込むような体制で腕を振り走る。

時折飛ぶように逆方向へ転換する。

疾走、回避、そして駆ける。

慣れてしまったのか、笑い声がさらに一段階高くなり、先読みしたように行く先に光の嵐。

足を止めても間に合わない。そう思ったのか、さらに大きく踏み込むと、方向を変え、腕を振りかぶり跳躍。

光の内側、まだ閃光の束が小さな流れとなっている場所へ、銃口の直ぐ側まで飛び込む。

「ひゃひゃひゃっ」

先端を回し照準を付けようとする。

が、間に合わない。要は振りかぶっていた右手を、鋭く銃口へ叩きつける。

ギン、と鈍い擦れる嫌な音。

閃光が止まるが、小さく金属の叩きつけられる音が響き続ける。

その間数秒、止まったような二人の男。

そして、一度高く音が鳴る。

先端にあてがわれたままの拳を振り抜き、腕から銃を飛ばす。

歪んだ笑顔のままの男。そしてさらに一步小さく踏み込み、同じく鋭く左の腕を突く。

回転しながら、M16と呼ばれた銃の模造品が飛ぶ。

右の足を引き、左の足を擦るように素早く男の方へ小さく寄せると。

「うひゃっうひゃひゃひゃひゃっ」

それこそ、弾丸のように。

達人のようでも、ましてや元からそれで生活の糧を得てはいないのだから、魅せるモノではない。

しかし武術の基礎を感じる素早い突きは、男の顎を捉え浮かせる。数秒の浮遊。どさりと落ちる音。

後ろへ飛ぶように下がると、「アルム、頼む！」と大きめの声で

言う。

広場の入口付近の板が倒れ、隙間から銀髪の少女が躍り出る。手には銃、しかし形はそう見えないこともない程度で、全体的に大きく、丸みを帯びている。

苦しそうにのたうつ男へそれを向けると、数回トリガーを引き絞る、最後に一度、口元を抑える手を狙う。

硬そうな、しかし粘っている白い粘着質の弾丸が、男の動きを阻害し起き上がれなくする。

そして最後に、ゆっくりと近づいた要が男のみぞおちを強く踏むと、ぐたと倒れ込んだ。

「ほら、やっぱり大丈夫だったろう？」

小さな傷跡だらけの姿で要は誇らしげに言う。

「……大丈夫だって……確かに成功はしたけど」

「不満？」

手甲を外しながら問い、折りたたみ懐へ入れる。

「うまくこの場所に誘導されてくれたじゃないか」

「……それは当たり前、前提条件。……私は必要だった？」

問うてきたアルムに、見ると顔で伝えながら男のポケットから落ちたモデルガンを拾う。

落ちていた大きめの四角い石を拾い、二度目に隠れた、周囲を挟まれたひどい惨状の壊れた柱の上に置く。

照準、アルムを背にし狙いを定める。

「見てなよ」

言うが早いかカチリとトリガーを引く。

次の瞬間には、アルムからみて左、要からみて左後方の板がゴーンと音を立てる。

「……………え？」

あつけに取られた、珍しい表情をする。

苦笑しながら、無駄に得意げに要は言う。

「僕、道具を使えないんだよ、呪われてるみたいに」

言いながらも何度か弾を放つが、全て飛ばす方が難しい方向へ飛ぶ、もしくは落ちる。

最後は拳銃を男にひつついたとりもちのようなものの上に放り投げ。

「至近距離ならどうにかなるんだけどね」

笑いながら言う。その姿がおかしかったのが困ったような笑みを小さく、本当に微かに浮かべる。

「だから私が必要だったの？私が居なくても気絶させたら……」

「もしかしたら近寄れなくなるかもしれないし、援護もしてもらうことができる」

夕焼けが、闇色に代わり黄昏に染まっていく。

「そろそろ暗くなるし、こいつを運んでしまおう」

アルムも頷くと、男のそばへ寄る。

要が男を背負おうとするのを手伝おうと、アルムが手を伸ばし男に触れる。

一瞬にも満たない時間だった。

静電気が流れる時のように、アルムがはじかれる。

「アルム!？」

男を放り捨て駆け寄る。

アルムの右手から、段々と登るようにして光が流れる。

要には見えていないが男の身体も、光に　そう、銃口に集まっていた光と同じ色に　包まれている。

胸、そして胴体を覆うと、収束し頭へと光が登る。

要は会った日のように上半身を抱え起こす。

青白い、美しいとしかいいようのない純粹な光が額へ至る。

光が舞う。

円を描くように、光が線を為す。

風がアルムの体から、いや、円を描くように飛ぶ光の粒の中心から吹いている。

決して強い風ではないが髪がなびく。

円を書くと、今度は不思議な文様がアルムの上、要の位置からよく見える所で展開される。

どこかで見たことのあるような形。

十の円形と、それをつなぐように線が走っている。

光は青く、輝いている。

文様の一部、要から見て右端の三つの円形を繋ぐ線の上側が、赤い粒によってなぞられる。

それによって一種禍々しいような、神秘的な赤い光を線が放つ。

今度はそこから出た赤い光の粒が円を描く。

不思議な文様はかき消され、飛び散る。

赤い粒は文字を描き、小さな球体を形作ると宙へ浮かぶ。

浮かぶ文字は『 V A V 』、粒が絵を描くように舞うと、杖を持った男を彷彿とさせる文様が描かれた。

光は宙を浮く球体へ集まる。

何が起こっているのかわからない要は、しっかりとアルムを支えたまま、口を小さく開けて呆然と光を追っている。

威厳のある、しかし何か矮小な声が聞こえる。

「 我は教皇、知恵と慈悲より生まれし寛容なる者。

始まりの扉を開く鍵、時によるならば女の象徴ともなるもの。

我が持つは矮小なる慈悲と寛容なる知恵のみぞ。

だが我は契を違うことはない。

狂い咲く光の奔流より我を組み上げたことを。

そして歪みより解き放ったことを永久に忘れることはないだろう。

友よ、同士よ、我配下の教徒ではなく同じ慈悲と知恵をもって進むものよ。

我は汝の運命を開き、さらなる道を開こう。

我が真名はウァウ、忘れることなかれ。

我は人と共にある意志、願いである。扉はそこに開いて  
いるのだから。 「

光の玉は渦となり、円と文字を巻き込みながらアルムへと流れ込  
む。

黄昏の色が周囲を包む。全ての光が流れ込むと穏やかな顔の額に  
先程浮かんだ文字が再度浮かび、消える。

沈黙が広場に満ち、影が消えてゆく。

今日は満月、狂った獣が踊る夜。

今宵の宴は、始まりを告げる鐘となる。

ここまでが物語としてのプロローグのつもりです。無駄に長い上に超駆け足ですみません。でもまあただ単に物語としてうまくやるといつよりどれだけ妄想をうまく垂れ流せるかだと思ってるので諦めます。もしよろしければこれからもよろしくお願いしますね？

殺人事件の犯人を倒してから一週間が過ぎた。

あの日、あの謎の現象の後要は犯人とアルムを抱えて必死に人通りのない場所を選び通り、なんとか犯人を『Brutes』のビルへ縛って放り込むと、直ぐ様アルムを介抱するため家へ帰った。もつとも帰ってすぐ、慌てている要を尻目になんともない顔でアルムは起きたのだが。

そして今、要は組織のビルへ来ている。

理由は簡単、成果の報告だ。

「結局、本当にただのテストだったんだな」

要はバレないように本当に小さく、呼吸に混ぜてため息を吐く。

前と同じ位置に座る鈴巳は笑いながら答える。

「そりゃあそうだろう、凡人のお前に本当に危険な事件を任せるわけがねえよ」

以前と違い、今は部屋に鈴巳と要の二人だけだ。

スズミが言うには「あいつらにも仕事っつーか、やることがあるんだよ。お前と一緒にでな？」だそうだ。

「しかし、光線を出す銃なんてあるんだなあ？買えるなら買いたいぜ」

「売り物じゃないだろうさ。現にあいつは買ったとか言っていないだろう？」

「いや、言ってる言っていないよりも問題があるぜあいつ」

「問題？うひゃうひゃ笑ってることか？」

「いやそうじゃない」

少し考え込むように鈴巳は黙る。

「あいつ、全然覚えてないんだよ」

「え、な、何を」

「事件の事だ、あいつに事件のことを聞いても大したこと聞き出

せないんだよ」

まず尋問をしていることに驚く。自警団のような物なのだからそこまでするのは要も思っていないようだ。

「でも大したことってことは一応聞き出せたことはあるんだろ？」

「ああ、自分がやったってことは自分で言ってるしな。ただどうやったかかを覚えてないんだよ」

「どうやったかって……」

「まあ別に覚えていなくてもいいにはいいんだが、タツシュがこれまた気にかけてな」

曰く、「新都の科学部と繋がりのあるのでは」とのことだ。

科学。そう、要はあの不思議な現象を話していない。科学的なものでは説明の出来ないわけのわからない現象、光の描いた文様と語りかけてきた言葉。

要はあれを調べることを決意していた、それは組織の人間にもアルムにも秘密で。

何より不思議だったのが、よくよく考えれば男が使った時には閃光を放った銃が、要がアルムに見せた時には普通の、おもちゃの金属弾を吐き出したことだ。

つまりあれは、銃自体のギミックではなかった、ということだ。

鈴巳はタツシュが新都科学部の能力はすごいなと言っていたことを言う。

「まあ調べた結果はただのおもちゃだったんだがな」

「そうだったのか……」

「まあとりあえず、あの事件はもやもやが残ってはいるが解決してんだ、もういいじゃないかってことだ」

自分から問題だとか言って長引かせた話を、鈴巳は強引に切り上げる。

そして今度は、一週間と三日前に送ってきた箱に入っていた封筒と同じモノを、要に差し出す。

「これって？」

歩いて近づき、受取りながら聞く。

「まあ報酬みたいなものだな、生活費込みだから返すなよ？」

「これは……」

数十枚の紙幣、少なくとも50はあるのではないか。

慌てながら要は、「こんなには受け取れないって！」と少し声を荒らげる。

「いやそんなことはない、前も言ったが人手がないんだよ、荒事に向いた人手がな。だからお前が出られるようになって助かった。その分込みだ」

サングラスの奥の瞳を笑みのかたちに細めて言う。

「で、でも」

「いいから、これから必要になるだろうし取っとけ取っとけえ」

「……わかった」

押しに弱いのか封筒を懐に入れる。

話はこれで終わりだと言わんばかりに鈴巳は腕を組みふんぞり返ると、ふふんと笑う。

「それでこの一週間で、何かあったのか？」

「な、何かって？」

「あの可愛い女の子だよ、同居してんだろお」

「何も無いに決まってるだろ……」

バカバカしいと行った風にまたため息を吐くと、扉を開けて出ていった。

\* \* \* \* \*

「てな感じだったんだよ」

「おお、お兄ちゃんは仕事人かつ」

「……………」

アンダーパークの中にある公園　といってもただの、使わない板などを置いてあるだけの広場なのだが　で、佐奈恵に簡略した

話を聞かせる。

アンダーパークの中は刺激が少ない、住んでいる人たちは何故かくせのある人が多いが、それでも子供にとってはつまらない場所なのだろう。14歳、本来なら中学生な年齢の女の子なら尚更、つまらないだろう。

子供がいる理由はいくつかある。親を殺されたうえ、暮らしているためのお金もなく、行政に保護を申請しても却下された子。親も働けなくなってしまった子。捨てられた子。事故に巻き込まれ死んだ扱いにされた子など。

鈴巳や他の人間が新都はおかしいという理由もこのあたりが大きくなる。やむない理由で生きていけなくなった人を、本来の政府に秘密裏で見捨てる、その上裏でパイプもあるかもしれないとなれば何を頼ればいいのかわからなくなる。

鈴巳は言う、例えば今これを問題点にあげて公に訴えだしても、人が信じるのはきっとパツと出の俺たちよりも政府だから、と。彼らが襲撃をかけると明言したのには、そう言った経緯があった。創作だと思っているのかキャツキャと騒ぎながら続きを最速してくる佐奈恵を嗜める。

広場はあまり広くない、普通の学校の教室程度の広さだ。広場の入口　簡易住宅の間の道を、赤毛の少年が通り過ぎる。いかにも上の空、といったような感じで、宙に視線をさまよわせている。

「ソウタ？」

要が名を呼ぶが、聞こえていないようでそのまま通り過ぎていく。足取りは確かだったが、どう見ても心ここにあらずだった。

「どうしたんだろ、あいつ」

「んふふ、それは恋してるからですぜ兄ちゃん」

面白がるように笑いながら、佐奈恵が教えてくれる。

「一週間ちよっと前、兄ちゃんが来る前なんだけど、新しく女の子が来たんだ。でも新しく来た人って生活の仕方とか、わからない

でしょ？だからソウ君がお世話してるんだよ」

「へえ、でも前来たとき誰もそんなこと言ってなかったけど」

「うーん、別に言わなくてもいいことだしねえ」

「それもそうだな。で、それでなんでソウタがあんな感じに？」

「鈍いな兄ちゃん、さつきサナが言ってたろお。こ・い・してるってなあ」

3人の後ろに現れたのは数人のむさくるしい男たち、作業着を着ていることから仕事の休憩中なのだろうか、服にはオイルの汚れがついている。

「へえ、ソウタが……」

「出会いが少ないからねえ、ソウ君もお年頃だしっ」

「まあそうなるよなあ」

がっはっはと豪快に笑いながら男は詳しく説明してくれる。

彼以外の作業着の男たちは、そのあたりに座って談笑しながらコーヒーを飲んでいる。

「お前が捕まえたっつー犯人がやった事件でな、身寄りをなくした子なんだよ」

「家族を？でも、事件にあつたのって大抵10代か20代の女性だけだったんじゃない」

困ったような顔で手を振りながら男は答える。

「それが聞いてみるとな、元々家族が事故で亡くなったんで親戚の姉さんの家に世話になつてたそうなんだが、その姉さんが狙われちまつてな……」

「それで暮らすあてが無くなったってこと……」

「ああ、ヒナリの姉御がたまたま路上に座り込んでたのを引つ張ってきたんだが、そのときやあもう今にも死んじまいそんな顔でなひどいもんだつたんだが、といい、笑顔を作り。」

「だがまあソウが熱心に、そりやあもう熱心に甲斐甲斐しく世話やいたおかげで元気になつてなあ！」

「へえ、じゃあ今はもう元気に」

「なってるなってる！会うなら探してきてやつぞ？ サナが」  
「なんでサナがつ！？」

面白い顔でサナが驚いている。顔芸だけで生きていけそうな程だ。がつはっはと笑う。

「まあどうせそのうち会うだろうし、今会わなくてもいいかな」

「そうだろうなあ、何せ広いようで狭いからなこ」

少し沈黙が落ちて、ひたすらコーヒー味の飴を黙々と舐め続けているアルムが、不思議そうにこつちを見る。

でも、と前置きして。

「恋してるって、なんでソウタはあんなに」

「そりゃあもう決まってるだろ？一目惚れした子に思いを伝えたくて伝えられなくて」

オヤジ臭い奇怪な動きでクネクネと踊りながら言う。

「もうラヴ！ラヴ！青春ってやつだよおカナメ！意識した女の子にいつでも会える嬉しさと心の中のラヴの悶々としたこのせめぎ合いがつ！」

「熱演していると気持ち悪いよオジちゃん……」

「オジ、踊らないでくれ、後ろの皆が顔青くしてる」

男の名前は小路と言らしい。

オジはそうか、と少しシヨンボリしながら。

「まあ本人の問題だけだな、こればかりは」

「そうだな、力になれるならなりたいけど」

少年が去っていった道を眺める。

\* \* \* \* \*

「昌子さん、具合はどうですか」

赤髪の少年が、薄い扉を開き家に入る。

白い内装、ほとんど家具のない狭い部屋。生活感はあるものの何か空虚な感じもする。

少年は手に少し小さめのカバンを持って、布団に転がっている少女の近くへ歩み寄る。

少女の年齢は少年と同じくらいだろう、恐らく高校生二、三年生だと思える。

少し青みがかかった黒、紫に近い風な裾で二つにくくった眺めの髪を垂らして、少女は起き上がる。

「ありがとう颯太くん、もう元気になってきたよ」

口調は少し弱々しいものの、年頃の少女そのものな声はハリがある。

颯太は「よかった」と笑い、カバンを置いて中を探る。

「ここはちよつとでも働かないと飯食えないスからね、病気とかなら別でもこれからやらないといけないことだし。ちよつとやってみませんか？」

言いながら、小さな端末と、それよりも大きな機械の部品の入った透明の箱を取り出す。

それはなに、と少女が聞く。

「内職つす、無茶とかしてぶり返したら大変なんで最初はこれで」

「これを、くつつけていくの？」

箱を開けて中に入っている二種類の部品を、組み合わせる。

「そう、単純な作業だからきつと気も紛らわせる」

そこで、しまったというような顔をする。

少女はふふと笑い、「大丈夫だよ」と。

「気にしてないから」

「いや、でもその、俺」

「君がいるから、寂しくはないよ」

優しい声で、慰めるように言う。

少年は顔を赤くしてそっぽを向く。

「慰めに来てるのになんでこんなことに……」

「ふふ、向いてないんじゃないかな」  
笑う。

「りよ、料理したことあるんだよな」

「まかせて、大丈夫」

居間から見える、一枚の薄いガラス扉に仕切られたキッチンに可愛らしいエプロンをつけたアルムがちょこちょこ動いている。

時計が指すのは7時、外は暗い。

要はそわそわしながらアルムの細い背中と可愛らしいお尻を見ている。

小さく破裂音。

「ほ、本当に大丈夫！？ 別に無理しなくても」

「心配しなくて大丈夫、味見もしてる」

相も変わらず抑揚のない声だ。

アルムの動きは少し慌てているようで、要は冷や汗を垂らす。

居間には美味しそうな臭いが充満しているが、台所から聞こえる音が不安感を煽る。

ソファに座る要の前の机には、それもまた要の私服のシャツと同じ黒い手帳が置いてある。

先程まで要は、あることについて考えをまとめていた。

あること   あの文様とアルムの関係。

(アルムにそれとなく聞いても知らなさそうだった)

つまり、彼女自身に関係はあっても彼女から能動的に手に入れた何かではない。

それに、まだ彼女がああ雨の日に自分に助けを求めた理由もわからない。

拾った理由は大げさなものではなかった。少なくとも、要にとつては大きくても他人には小さな理由だ。

(それに、あの光の球は俺に語りかけてきた)

扉は開かれた、人の願いがあれそのものだとも。

訳が分からないが、あの光線銃も同じく訳が分からなかった。

手帳を手に取り開くと、あの文様を覚えている限り書いたのである。絵と、言われた言葉のメモや、犯人の使ったものを要から見た様子などが書かれている。

しかし、それは一見すると妄想やマンガの好きな中学生のノートのようなものだ。

馬鹿馬鹿しいかな、とすぐに手帳を閉じてソファの上に放る。

カチリと火を止める音が小さく聞こえる、盛りつけに入った様子だ。

要は忘れていた課題を催促された学生のような顔をしながら、汗を垂らした。

黒い机の上に湯気を立てた料理が並ぶ。

茶碗に持った水気のあるご飯に味噌の小さな塊が少し浮く味噌汁、大皿には焦げや生の部分の目立ってしまった不格好な肉と野菜の炒め物が乗っている。

「どうぞ」

可愛らしいエプロンをつけて、髪をポニーにしているアルムが手で促す。

頬は少し恥ずかしがるように朱に染まっている。

対して要は不安そうな顔だ。

「……いただきます」

もしもまずかったらどうしよう、そんな考えが浮かんだ顔で炒め物を口に運ぶ。

口の中で噛み、噛み、飲み込む。

生野菜をかじって、焦げを噛み砕いて、妙な食感の何かを飲み込む。

味付けは中々、醤油風味。

「……アルム、料理作ったのは初めて？」

「……うん」

「神妙な面持ちで要が尋ね、それに少し不安になりだした表情で答えるアルム。」

「今度は味噌汁を器ごと口に運び飲む。」

「器を置く。」

「初めてにしては……うん、お、美味しいよ」

「言ってオカズとご飯を口に運ぶ。」

「アルムの顔が表情は大して変わらないが、それでもわかる程に明るくなる。頬がさらに赤くなり、尻下がりになっていた眉が戻って、目が少しだけ開かれる。」

「これ、自分で調べて作ったの？」

「うんうんと無言で頷くアルム。」

「その間もパクパクと箸を進める。」

「そして大きな皿が空になる。」

「背筋はまっすぐ、動きもきびきびとしている。」

「「ごちそうさま」

「……おそまつさまでした」

「皿を持ってキッチンへ歩いてゆくアルム。足取りは軽い。」

「対して。」

「動かない。」

「ごちそうさままで手を合わせた状態から一切動いていない、さらに言うならアルムが何も食べていないことにも何一つ口出しをしていない。」

「皿を洗う音がする。」

「時計の針が進む。」

「ぐらり、揺れる。」

「要の口の中で粘性のある何かが焦げ及びその他の物と宴を始める。」

「「……ごめ……ん、アルム……やっぱり……これ……」

「真っ青な顔に全身をガタガタと震わせながら呟く。」

せめて、後でそれとなく彼女に伝えるにしても、今は気づかないようにしてあげよう。

俯せに倒れ、机に顔面を叩きつける。

耐え続けたせい、かなりの勢いで。

たまたま当たったせい、でついたテレビが虚しく光っている。

ニユースは人気バンドの全国ツアーや自衛隊に対しての反対運動、汚職をした政治家だらけの党を現在の与党が非難したり、予算追加の発表などもユニークな顔のキャスターが滑らかに言っている。

一向に動く気配のない要の顔が、蛍光灯に照らされて、照っていた。

\* \* \* \* \*

「~~~~」

時計は9時を示している、そこは暗い部屋。

窓の外はまだ夕焼け程度に明るく、機械の動く音や人の声も聞こえている。

しかしカーテンを締め切った部屋は、鼻歌交じりに何かを組み立てる彼女の手元にある機械の明かりだけが薄く青く光る。

傍らには小さな箱に入った細かな部品、その反対側にはそれを組み立てた物が小さく積まれている。

メロディを奏でるのは、近頃若い人の中で人気のバンドグループの歌だ。

ほんの少し前まで、少し不幸な境遇だっただけの彼女だから、流しりの物も年頃の少女らしく詳しいのだろう。

ほんの少し間を置くようにメロディを奏でて、歌が終わったのか、途切れる。

先程まで聞こえた人の声はもう遠い、耳を澄ませなければ聞こえ

ないだろう。

カチャカチャと金属やプラスチックを合わせる音や布の擦れる音だけが聞こえる。

部品が減っていく。残りは半分程度。

そこで不意に、外の夕焼けのような光が消える。

闇。青く小さな光だけが彼女の周囲を淡く、照らす。

彼女の顔すら少し見えない程度の光。

「……時間より早いなあ」

デジタルの時計は隅で怯えるように、照らすことも出来ないほど小さく弱々しい光で時刻を知らせる。

時間は9：48、この天井の電灯が消え完全な暗闇になるのは10時だ。

「今日は早かったのかな？」

カーテン越しに窓の外を見た少女は、手を組み立て済みの部品をもったまま膝に下ろす。

声はもう誰のものも聞こえない。

静かだ、外ならまだまだ騒がしい時間なのにここはとても静かだ。彼女は思う、つまらない、と。

そして同じく思う、それでも孤独な外よりもどこよりもここは優しい、と。

孤独はいやだ、親は自分を捨て、お姉さんも私を残して消えた。

学校も、家でも、それ以外の数少ない場所も、自分を受け入れてくれたところなんてなかった。

愛が欲しい、誰かに自分を欲して欲しい。彼女は思う。

不意に、唐突に、突然に、風のないはずの部屋のカーテンが揺れる。

染み出すように、この黒い闇よりもさらに深い黒い人影が現れる。鎖が音を立てる。影の頭部を覆うフードと仮面の間から溢れる銀の髪が薄く光る。

少女は振り向かない、恐怖感から、疑心から。

暗い部屋で人の気配を感じたときの、通常の人の反応は震えて縮み上がることだろう。少女はそうした、そうするしかできない。

透き通る声、機械でも人でも出せないだろう水の流れるような、空の青さをそのままうつしたような声で、影は語りかける。

「怖いか」

クリアな、染み出すように伝わる声にさらに震える。

寒さはない、ただ背筋は冷たく震えている。

動くことはできない。

「怖いのは、恐怖を感じている対象は、何だ」

黒く、白い仮面がほのかに浮かび上がる様子はまさに霊的。

それでも銀の細く流れる髪が神聖さを保つ。

「寄り添った者からの拒絶か、群れて個性が消えることか、誰からも必要とされない孤独か、それとも愛を、欠片程の自覚すらない愛を抱いた相手そのものが怖いか」

声に感情はない、しかし機械的でもない。

神の御告のようでもない、群衆の叫びでもない。

少女は怖かった、ただ怖い。

しかし口は動いた。

「全部が怖いよ。」

すらりと出た。

心から思っていたのかはわからないが、あふれ出てくる言葉は止まらない。

「親もお姉ちゃんも私が嫌いなんだよ。私の薄い個性なんて誰かといったら消えてしまうんだよ。だから誰とも触れ合いたくない、でも一人は嫌なんだよ。だからって優しくしてくれる人に頼ったらいいわけじゃない、いつか見捨てられるから、私は価値がないから。」  
弱い少女はボロボロと塗装が剥がれるように、言葉を流す。

影は身動きしなかった。少女が言葉を発し切ると仮面の下の口を開く。

「君には資格がある。心から溢れる悲鳴が、叫びがある。」

ゆつくりと、鎖を鳴らしながら片手を少女へ向ける。

滑るように一歩、二歩、三歩。少女の後頭部数センチまで手を近づける。

「立ち向かいのは怖いだろう、孤独に過ごすのは辛いだろう、自らの心を真正面から見ずに逃げるのは悲しいだろう。」

影の露出した白く細い、骨が浮き出た手に幾重も巻き付けられた細い鎖が淡く赤く発光する。ついで、手首の大きな鎖も淡く。

赤と青のミラーボールを少女が抱えているように部屋が照らされる。

「君が求めるのは向き合う力が、逃避する力が、現状をすべて破壊する力が」

「こんな気持ち知りたくもない」

「逃げるか？」

「向き合わなければいけないと同じよ」

「この世の恐怖から背を向け、殻に籠もり耐え空虚な心へ逃げ込むのが望みか」

「そうだよ、自分が傷つかなければいいのよ」

私は私だけが大事なんだ。

赤く光る鎖、その光が少女の頭へ吸われるように流れ込む。

瞳がゆつくりと赤色へ濁ってゆく。

「君は愛を望み、それ故理解せずされず、永久に美しく孤独を感じず生きるための殻を欲するのか」

影が揺れる。光は収まり、ちやり、と音を立てて影の白い手が闇へ引き戻される。

雫の垂れる音が、聞こえる。

「君の叫びは、君の心からの悲鳴は君から溢れる。君から発された思いは形となる。」

影が溶ける、闇へ。

「それは君の心そのものだ。」

雫が、湿った布の立てる独特の音が部屋で鳴る。

闇が包む部屋、青く照らされている。

影が消えて、時刻は10時を数分超えている。

青い光が少女を照らす。

黒い雫。

影と同じ、闇より深い黒い闇の色の雫が彼女から垂れて布団へ染み込む。

手元の部品が小さく音を立てる。

底冷えするような寒さが、急に部屋を包む。

夜だ、まだ夜は始まったばかりだ。

しかし地下の園は、完全な闇の中。

\* \* \* \* \*

黄色い電球の照らす明るい部屋、少年は2つ並んだ布団の上でぼんやりと思考する。

パジャマ姿の佐奈恵が薄い扉を開けて入ってくる。

「ソウ君、寝ないの？」

「うつせー、考え事だよ」

「昌子さんかー、確かに可愛いよね？」

「ばっ！？」

「やっぱりそれかぁ」

ししし、と笑って布団に潜り込む。

「好きだーって男らしく言っちゃえばいいじゃん」

「出来るかよ、それに今はスズミさんとかにお世話になってる状態だしな」

「まあそれはそうだけどね、人の心は自由だよっ」

「お気楽だな、お前は」

言って、颯太も布団へ潜り込む。

「消すぞ？」

「いいよー」

真っ暗。

大して変わることもないんだし急ぐ必要もないよな、そう考えて  
颯太は目を閉じる。

外の天気はわからないけれど、それでも明日は晴れる気がした。

アパートから徒歩で二十分程の場所、商業地区と一般居住区の間にあるほどほどに大きな駅前大きな通り。昔を思い出させるような小さな本屋が並ぶそこは図書通りと呼ばれる。

そこから三本大きな通りを挟んだ場所に立つ広い敷地の建物、それが新都南東部唯一の図書館だ。白いタイル張りのような外壁に、イベントの知らせが何枚も貼られている。

入口は数段通りより低く、降りる階段の脇には主婦達しか使わなためか二枚程度の新しいチラシ以外は破れ剥がれている。

まだ少し肌寒い3月中旬の風を受けて少し要の体が震える。

いつものコートを脱ぎ、若者らしいラフな服装を見せている。

アルムは居ない、朝彼に部屋を整えておくべきだと言われ家具を配置しているためだ。

壁と同じタイル張りの、欠けたり汚れが目立つようになっていて短い階段を降りて、ガラスの自動ドアをくぐる。

図書館独特の古い本と新しい本の香りが混ざった、人によっては眠くなるような気持ちのいい臭いが鼻腔をつつく。

中は暖かく、炬燵のように眠気を誘うが、要はなんともないように階段を上がる。

入ってすぐ前のエレベーターの扉脇にある案内図には、一階から四階までの詳細が載っている。こども向けや、歴史に数年分の新聞の保管、若者向けの場所もあれば小説をひたすら集めた部屋もある。要は大きな文字で『3』と書かれた階で階段から出る。

三階は研究などに使うようなものほどではないが、難し目の学問書などが置かれた大きな部屋が大半を閉める階で、普段は十数人程度が利用している。

今日も普段通り十に満たないくらいの老若男女が、真剣な顔で角の曲った厚い本を読みふけている。

要は入口から奥、広い部屋の端の方に纏められた棚の前へ足を向ける。

茶色い木の本棚には神話学や宗教学と言った、およそ普通に生活していれば興味を示さない限り関わることのない学問の名前が書かれている。

彼の胸ポケットに入った手帳から察するに、纏めていたアルムのあの現象に関して調べに来たのだろう。

「どこかで見たことがある気がするんだよなあ……」  
実にさり気なく口の中を労わるように動かしながら、時々ぼそぼそと呟き本を探す。

時折本を手に取り数枚ページを捲ると、脇に抱えたり棚に戻す。それを繰り返し、選別の末五冊程抱えると近くの長机に本を置き、パイプ椅子にどっかりと座り込んだ。

辞書のように分厚い神話や聖書の解説を取り扱った本を開き、流すように目を通す。

半時間ほどかけて一冊見終わると、次の本を手に取り繰り返し返す。マナーの悪い学生や老人もこない、静かな時間が流れる。

二冊読み終え、辞書程の厚さの本を読んで疲れたのかパイプ椅子にもたれて息を吐いた。

めばしいものはない、時間の無駄かなと考えながら力を抜く。

「すごいですね」

いつの間にか向かいに座っていた、線の細い若者が力が無いように見える微笑みで言った。

「これ全部読まれるんですか？」

顔の造形は良くはないが、アルムとはまた違うベクトルの不思議な雰囲気を出す青年だ。影のあるようなイメージを抱く彼は、さぞ女性に人気のあることだろうと思う。

彼の手にはそれもまた分厚い本がある。抱えるようにページを開いている。

「ああ、ちよっと捜し物で」

「へえ……神話に興味があるんですか？」

そういう彼の手にある本のタイトルは、『解釈の数だけある天地創造』。作者の名前はジョージ・K・ファリック、様々な分野で小さな功績を残した50年以上前の研究者だ。

彼は自分の主張の多くを本にして出版し、さらにそれが売れたためこれだけの時が経った今でも重版し続けられている。彼の主張はユーモアまじりに的確なところを突く、と地下にいた頃誰かが絶賛していた。

しかしながら彼の出した本の半分以上、実に三分の二が宗教や神話に関する物なので、世間で言われる以上に理解の難しいものとなっている。

それを読んでいた青年は中々に頭がいいのだろう。

「ええ、ちよつと好奇心から興味が出まして」

「いいですよね、僕、好きなんですよ」

「どのあたりが？」  
「いやあ、人の信じる力がこんな凄いものを作り出すなんてって思うと、面白くて」

砕けた喋り方でお願いします、と青年は言う。

「読書の邪魔をしましてすみません、僕、いすみさいま泉才真さいまって言いま  
す」

「えつと、白宮 要です。ふ、普通にしゃべったほうがいいのか  
な」

「ええ、お願いします。本当にすみません、その、何か気になっ  
たもので」

あはは、と笑う。

「あまり図書館には来られないですよね」

「そうだね、来る用事もないから」

普通はそうですね、と青年は返事をしてまた小さく笑う。

「僕はある楽しみが無いから、せめて知識だけでも持ってい  
きたいと思ってまして」

「小説とか、映画は観ないの」

「あまり派手な物は得意じゃないですし、他の静かな物もあまり合わなかったの」

「だから、神話とか専門的な本なのか」

「そうですね、想像力が上がるみたいで気持ちがよくて」

よく笑う人なのだと要は思う、そして同じように思うのは影のある表情。

調べものはどうせこれ以上調べても進展は無い、そう考えて要はおしゃべりに没頭する。

彼はあまり喋る方ではないのだろう、溜まった物を掃き出す気持ちよさを求めるように喋り、問うて来た。読んでいた本について、どの本がおすすめか、こういった分野の学問も見てみたいけどどう思うか。彼は静かに喋る方で、幸い周りから注意はされなかった。

才真の話は面白かった。程良く脚色も入れつつ大切な言葉を抜き取って行く。

ユーモアを混ぜて面白い物を書くのが得意そうだが、要は少し前に思い出した研究者に誰かが言った言葉に似せて思う。

立ち上がり本棚を前にして話したり、隅の方の机で喋ったり。時間が経つ。

外は明るい、低い鐘の音が鳴り時計から鳩が飛び出る古いギミツクが作動する。

「12時……閉館ですね」

「あれ、閉館時間早過ぎないか？」

「ここはお昼までなんですよ、後は夕方から子供たち向けにもう一度開くんですけどね」

持っていた本を棚に戻し、階段を降りて茶色いマットの敷かれた玄関ホールへ出る。

ガラスの自動ドアを通るとまた階段を上がり、通りから入ってくるスペースへ。

彼は少し歩き、横にいる要をしつと見下ろす。

「僕、この辺りに住んでるんです。平日も休日も、大抵は図書館に居るので。」

薄い色の、男にしては長めの髪を揺らして。

「また見かけたら声をかけてくださいね」

そう言い、長身に似合わない小さな歩幅で歩いていく。

「わかった、またそのうちね」

昼の青い空の下、要も家路についた。

\* \* \* \* \*

機械の稼働音が強く響く天井の高いガレージのような場所の中。作業用と思われる巨大な手のような物を前面につけた、所謂シヨベルカーのような物が中心に置かれている。

機械の群れは全て、小さくても高さにして2m。中心のシヨベルカーのような機械に至っては6mはあるだろう。

機械の群れの中心を5人の男たちが、機会に向かっていたり箱型の様々な大きさの端末や工具箱などを持って取り囲んでいる。

作業着姿でハードカバーのような機械の端末を手にした赤髪の少年が長身の男に話しかける。

「小路さん、接続部の整備終わりましたッス」

颯太は指先で端末を操作して、大きなモニタのついたアーケードの筐体のような形の物に向かいつつ、振り向きそれを見る。

手は動かしつつ、モニタには複雑な計算式と見たことのないような名称のリスト、機械の設計図のような物も写っている。

「おおはええなソウ、ちよいとこっちに向けてくれや」

「一応再確認もしておいたっすから、間違いはないでしょうけど」と端末を逆に向けて、小路に見せる。

ちなみにこの端末と呼んでいるのは、正式には『LT-04』と言い一昔前に新都で開発されたデスクトップPC並のスペックの『携帯型端末LIMET』を、この小路自らが改造しつつ作り出した

改良品である。

一つ一つの開発単価が高いためそれ自体の量は無いが、簡易型の『LTS-2』は小ささも相まって地下では常用連絡手段として全員に配布されている。

「んー、確かに問題ねえな！ で、今日のノルマはやってもらったわけだが……」

小路は真面目な男らしい顔つきから一転、イヤラシイスケベな親父の顔になると、

「……で？ 今日もあの子のところへ通い妻ならぬ通い夫なのか？」

「なつ、い、いやそんなじゃないんすよ！」

「まあまあまあ、オジサン知ってんだぞおお前が毎日せつせと家に行ってること」

なおこれは、地下の全員が知っていることだ。

颯太は顔を髪と同じように真っ赤にしながら開いている左手を全力で振り否定する。

「そそそそんな、俺はまだ慣れないだろうから手伝ってるダケデ」

「いいんだよお男も女も愛を知って進んでいくのさあ」

妙に悟ったような気持ちの悪い顔で颯太の両肩を叩き、自分だけ納得するようにうんうんと頷く。

「片付けはオジサンがしてやるからさっさと行きな……」

急に格好を付けながら無意味に背中を見せつけ、作業に戻る小路周りはこういう状況を何度もみているのか、慣れた様子で作業を続けている。

颯太は呆れ顔ながらも少し嬉しそうに「わかりました」と告げる。

「じゃあ早いっすけど終わりますね、お疲れ様です」

「昌子ちゃんによるしくな」

小路を含め近くにいた作業中の男たちから声をかけられながら、金属の隔壁のようなモノの隣の扉から出てゆく。

無意識に半目になりながら「まったく変わらないなあ」と呟く。

扉は分厚い、一つ扉を通ると、数歩だけの通路がある。それを潜れば居住区の端だ。

居住区の端、そうは言っても広い空間の中では同じ場所とは思えない。

所々に立つ支柱や放置されている巨大な機械の群れ、今出てきた物と同じようなシャッターもあちらこちらにある。家の群れは遠く、本当に地下なのかと疑問を抱くほどの広さを改めて実感する。

無機質な物だけが立ち並ぶその間を抜けて、たくさんの人が笑いあっている中心地へ戻ってくる。

自分の、自分と妹の家へ入り作業着を脱ぐと中のシャツはそのままに制服のような私服へ着替える。台所に向かい湯を沸かして、明るいパツケージのカップ食品に注ぐ。

二分待ちまだ硬い麺を解しながらかきこむと、流しへ放り込み、壁際に放置されている靴を手にとってまた家を出る。

その顔はどことなく嬉しそうな、小さな笑顔だった。

時計は、午後12時ちょうどを示している。

8th episode / 未だの出会い (前編) (後書き)

午前午後で別れているので前編です。長くないのにごめんなさいね  
I。あと更新遅れて申し訳ないです。ゲームしているとなんか自分の  
構成に疑問しかでなくなるんですよね。

気持ちが悪いくらいに雲のない美しい青空。

白い陽光が灰色の尖塔郡を、田舎らしさを少し残した住宅街を照らす。

少し坂のある昔ながらな住宅街を走る、黒いシャツとスポーツ用のパンツの要。足にはいつもはいている光沢のある硬そうな靴ではなく、一般的なデザインのスニーカー。

今は日課のトレーニングの最中だ、走って、負荷を与えて体力と筋力を鍛える。昔地下にいた頃に鈴巳とドルーに言われてからずっと続けている。

この間の、急な犯人との戦闘だってこれを続けていなければ何もできなかった。

普通ならありえない軌道に曲がってしまう銃では戦うことすらできなかつたろう。

この身体が僕の武器だ、要はそう考えている。

朝は知識を得て、昼は身体を鍛える、健康的な生活そのものだ。

少し風化した古いアスファルトの道を普通の人より数段早いペースで走り続ける。もっともその道の人間には勝てはしないレベルの速さだが。

走りながら思考。

朝結局調べられなかった、あの文様のことではない。確かに関係はあるが、それとは違う。そう、超能力と言っていいだろうという妙な確信を持った、あの光。

昨日も同じことを考え続けていたと思う、けれどいままで20年以上生きてきたはずの自分にとってあれは異常で、きつと理解できないものなのだ。要の脳内を駆け巡る。

そんな考え事をしながら広い公園に差し掛かる、いつもはここで戻るのだが、なんだか中に入ってみたいくなり背の高いもっさりとし

た木の間の入口から侵入する。

中は広い、ベンチは両手でないと数えられないだろうし、遊具も点々とだがある。めったにこない遠くの公園。

要が歩いて入ってゆくと、一人の背の高い人が居る。

朝会った彼と同じくらいか、それよりは小さいかもしれないが要よりも十センチは大きいだろう。

奇妙な格好をしたその人物はジャグリングをしながら薄く鼻歌を歌っている。

器用だ、両手では足りない数の空き缶を回しながら歩いている。

そしてゴミ箱の前へ行くと、一つづつ回しながら飛ばし、入れていく。

後ろ姿はサーカスのピエロ、というよりは物語に出てくる道化師の方がイメージが合っている。それらしい帽子に、青と白、アクセントに黒と赤を使った衣装を身にまとい、端に赤いラインの入ったマントのような物を着ている。

空き缶を二つ以外全て入れ終わると、それを手に持ち止め、捨てて終わる。

長身の道化師は振り返る、その時初めて要に気づいたのだろう。

「おや、お客さんがいたのか」

笑い混じりにくぐもった声で言う。その顔は仮面に覆われていて不気味だが、どこか愛嬌を感じさせる。

「あの数でやるなんてすごいですね」

今日は妙に新しい出会いが多いと要は思う。

あはは、と彼は愉快そうに笑う。佐奈恵のような可愛らしい風ではなくて、不思議な理解しがたい感じの笑い。

「あれですごいって言うってもらえるなら、嬉しいけど寂しいなあ  
仮面に彫られた笑顔に合った笑い。

「どうだい、ちょっと僕のショー見ていてくれないかな？」

「いいんですか？」

「もちろんさ！」

芝居がかつた言い方、大振りな動作で両手を広げる。どこから出したのか、次の瞬間には道化師の手に帽子が取られている。

「さあ、中から何が出るかな？」

帽子の中へ手を入れて取り出すと、中から白い鳥が現れる。正確には、白い蠟で作られた鳥の人形だ。

「人形？」

「いいや、人形じゃないよ。」

1、2と数え滑らかな動作で人形に帽子を被せ、すぐに取り去る。すると人形だったハズの鳥が羽ばたき、地面に降り立つ。

鳥はキュルキュルと小さく鳴くと、飛んでいく。

「まだ驚くには早いよ？」

道化師はまた帽子に手を入れると、国旗の連なった紐や宙に舞うトランプ、しまいには剣まで引きずり出す。

マジシャンがよく出す物を一通り出して戻してを繰り返して、その後帽子を要へ手渡すと懐からカードの束を取り出す。

「さあ、ここには仕掛けはないよ。よくご覧あれ」

空気をなでるように、まるでそこに壁があるかのように一度なぞる。その上を束を持ったままなでると、宙に浮くようにカードが円形に配置されていく。一周し終わると手を振り払い、何もなかったことを示す。

「う、浮いてる……」

「今の手持ちでできるのはこれくらいかな？」

右手をカードのそばに差し出し、空いた左手を鳴らすとカード達には意思があるかのように道化師の手へ集まり束ねられていく。

最後に間を開けて集まってきたカードを左手で素早く手に取り、示す。

気にしていなかったため気付かなかったが、そのカードはタロット。描かれた獣を従える、器を手にした男の図されたカードの下部には『The Charriot』と記されている。

「どうだった、おもしろくはなかったかな」

「す、すごいよ！どうやったんだ！？」

少し興奮した様子で要が絶賛する。照れたように道化師は笑いながらカードを懐にしまう。

手品だからね、と道化師は笑う。

「イリユージョンだよ、不思議な不思議な楽しいショーさ。だからやり方は教えられないなあ」

すこし離さないかい、そう言う同道化師はベンチを指し示した。

「どうしてこんな時間にここで？」

要は隣に座る、名を名乗らずピエロと呼んでくれと言った彼に問いかける。

「売れない手品師は暇なもんさ。それに、誰かを楽しませるのが生きがいだからね」

見てくれる人がいればと思った、そう言った。

彼の姿はどこからどう見ても道化師と言える、もっとも一見すれば異常者なのだが。

仮面に表情があるかのように、彼の声は感情を躍らせながら響く。

「君は？どうしてこんな時間にここへ？」

「えっと。まあ日課で走ってたらここに。」

「じゃあ、運命のめぐり合わせだね」

キザな勘違い男が言うようなセリフをさらりと、男に吐く。

「で、それだけじゃあないだろう？」

「……え？」

「君は何か悩んでいるように見える。」

ピエロは笑顔の仮面を奇妙に傾けながら言った。

「悩みはいいよね、人を変えるよ」

「悩みが人を変える？」

「物語の主人公は、皆困難を乗り越えて成長する。」  
嬉しそうに言う。

「いくつもの問題を、悩んで悔やんで乗り越えて。それで強くな  
っていくんだよ」

確かに、と頷く。

「だから人にとって悩みっていいものだ、ボクは思うよ」

「そですかね」

「まあ難しいなら誰かを頼るといいよ」

ピエロは立ち上がる。

公園の木々は春の訪れを感じて少しづつ、花を付け始めている。

「君がもしもボクに会いたいと思っただなら、またここに来てよ」  
そう言うとピエロは軽く手を振りながら公園を出ていく。

要も、立ち上がるとその後を追う。しかし外には誰の影もない。

狐に化かされたような、幻覚を見たような妙な気分で、要は立っ  
ていた。

8th episode / 未だの出会い (後編) (後書き)

我ながらしょぼい。

アンダーパーク、蛍光灯の光に照らされる地下の園。

その居住区の中にひとつある以前も佐奈恵と話していた広場に、颯太と鈴巳が座っている。

年を感じさせつつも逆の若さを滲ませる、その陽気な顔が今は真剣だ。

「ここに来て二週間くらい、だったよな。」

「そう、です」

「慣れなかったってことかねえ」

二人は同じ、椅子変わりの資材に座っている。鈴巳は天井を見つめながら質問を続けた。

「六日目ってことだが、何か兆候はあったのか？」

「……何も。」

「で、明らかにいるだろうってのは三日前からか」

「……はい」

「三日間は倒れてたってことでわかるが、慣れないとか避けられるくらいしか説明できないわなあ」

沈んだ顔で俯く颯太。

元気はあるようだ、が、年頃の少年が好意を寄せる相手に避けられればこうなるだろう。その典型的な雰囲気を作っている。

「今日もう一度、行ってみます」

「要も連れてだったか？それで解決するならいいんだけど」

「別に来てもらうのは誰でもいいんですよ」

「いやアイツはなんだかんだ言ってる問題に突っ込みたがるしな」  
後ろにかけていた体重を今度は前に倒して。

「それに閃きというか、妙なところで問題点に気づいたりもするしな。いい人選じゃないか？」

「……」

「ああ、問題はそこじゃなかったな」

困ったような表情を浮かべながら立ち上がり、上の通路に視線を向ける。

「とりあえず、解決できないなら外に出たほうが楽だろうしな。

オレが何とかするさ」

「……お願い、します」

「最終手段だしな、トップに任せろ。あの年でやってくのは、辛  
いだろうしなあ」

「そうですね。」

「援助って手もあるが実りがなさそうだし、それも無理だあな」  
陶器のような白い歯を見せながら笑い振り向く。

そこに今来たのか要とアルムが広場に入ってきた。

「鈴巴？」

「おお邪魔してるぞ？すぐに戻るかな」

「ありがとうございます」

「中でいざこざがあったら困るのは俺達だからな、とにかく任せ  
たぞ」

言って悠々と歩き、去る。去り際に要の肩をポンと叩いていった。  
要は状況がいまいち飲み込めないようで、檻を叩かれた商品犬の  
ような顔をしていた。

「えっと……これから、行くんだよな」

「ええ、頼むつすよ要」

「颯太が頼ってくれるのも久しぶりだしね、早速行こうか」

「……昌子さん、だっけ」

「そうだよアルム、颯太が説得するのに付いていっていただけ」

すぐに歩きだした颯太の後を追うように、要とアルムも動き出す。  
昨日の夜に連絡が来たため、未だに理解できていないアルムが首  
をかしげている。

「あー、颯太、さわりだけでいいからもう一回教えてくれないか」

「要するに、引きこもっちゃったんですよ。昌子さんが。」

「引きこもったの？」

「そう、病気でもないんだよね？」

昨夜伝えられたことの確認をしながら、昌子に割り当てられた居室へ向かう。

颯太の顔は不安で満ちている。昨日も一昨日も、一週間も拒否され続けたことか。ただ彼女の様子が心配なのか。

「病気がどうかは、会ってないからわからないです。最後に会ったときは渡してた仕事の成果を預かって、ちよつと話しただけっすから。」

「……顔色とかは、どうだったの？」

「特別悪くもなかったですけど。彼女、元々来た時から精神的にまいってたんで」

「そういえば僕も聞いたな、家族がいなくて。」

「だからかわからないですけど、来た時も結構体が弱つてて。でも元気になってきてたんですよ。」

話すたびに辛気臭くなる颯太を励ましながら、三人は彼女の家へとたどり着く。

平屋と言うのか、地下にある家は全て4部屋とトイレだけが着いた一階建ての家だ。

数秒間扉を見つめると、こころなしか元気のなくなっている赤い短髪の頭を降る。そして簡素な白一色の扉をノックした。

「昌子さん、居るっすか？」

一切の音がしない。人がいるならほんの少しでも聞こえるであろう音すら。

要とアルムの視線を背に受けながら、もう一度颯太は声を上げる。「居るなら返事をしてくれ」

ゴンゴンと扉を叩き続ける。しかし一切の反応がない。

また頂垂れて、何を思ったかドアノブに手をかけて回した。開く。

「あれ……？」

扉がゆっくりと音を立てて開く。

中は暗く、窓から射す人工光だけが頼りだ。

しかし人影は見当たらない、先程まで居た形跡はある。乱れた布団や流しに置かれた食器、一週間前に回収しなかった分の部品や端末も置いてある。

「し、昌子さん……っ?」

返事はない。言葉を吸い込むような暗闇だけがそこにある。

その時颯太は、射し込む光に照らされる一枚の紙を見つけた。小さな机の上に置かれたそれには、一文だけ、今さっき書いたような乾いていないインクで文字で書かれている。

「ごめんなさい、と。」

「……………出ていったんだ」

「颯太っ!？」

呟いてそのまま走り出した颯太。先までと同じようにあとを追いかける二人。

アルムは何だったのか、と視線で問いかける。だが要は首を振るだけだ。

「僕は昌子って人に会ったことないし、けど多分颯太には当てがあるんだよ」

以前使った階段、今日も降りてきたそれとは別の昌子や颯太の家から近い階段を駆け上がる。金属の音を響かせながら颯太達は走り、運搬通路を走り抜けて地上への階段に通じる扉まで近寄る。

そのそばにいた作業服の老人に少し足を止めて問いかける。

「昌子さん見なかったすか!」

「あ、ああ。さっき通っていったと思うぞ?」

「ありがとう!」

颯太は再び走り出すとあの重い扉を軋ませながら一気に開く。長く続く階段を駆け上がり地上の扉を開いて駆け出る。

地上のビルの窓からは、要とアルムが来る時は降っていなかった雨が降っている。

それは異様だった。黒く、ひたすらに黒く醜い雨。闇よりも深く沈みこみそうなそれは地面にも溜まり、しかし普通の水と同じように流れている。

「な……っ」

要は思わずそれをみて足を止めるが、颯太は止まらない。

アルムがそのまま走って追いかけるのを見て、要も慌てて動き出す。

ガラスの正面玄関を抜けると、黒い雨の中をそれよりは少し明るい紫がかった髪の少女が歩いている。

元は明るい色だったであろう服は、黒い雨に濡れて染まっている。タールや汚水とも違うその液体は彼女の腕や髪をつたって落ちる。

彼女はふと、気づいたのだろうか。ゆっくりと幽鬼のようにそう、あの殺人犯を思い出させる虚ろな感じで　こちらに振り向く。

「……冒子さんっ！」

颯太が雨の中を走り寄り、声をかける。距離は十メートルと少し。土砂降りの嫌悪感を増幅させる雨の中を四人は立つ。

半分こちらを向いた彼女の顔はうつすらと笑みを浮かべているが、それは喜びからくるものではなく皮肉な感情を込めたモノに近い。

要はどこか薄ら寒さを感じながら二人を見守る。

赤い髪を濡らしながら颯太は続けようとするが、少女が言葉を先に発して止める。

「わかつちやったの。」

決して美少女ではない、しかし年頃の可愛らしい少女の口から出たその言葉。それは想像を超えて冷たい。

研いだ氷の刃のような、冷やかな感情で形作られたもの。

「颯太くん、君は酷いよ」

「し、冒子さん……」

「孤独な私を見て笑っていたんでしょ？こいつは自分が居ないとダメな人間なんだって、こいつはかわいそうなやつなんだって。」

「そんなことっ」

「皆同じ、皆一緒。私みたいな人間は必要とされない。」  
瞬きもせず、じっと颯太を、要達は居ないかのように颯太だけを見つめる瞳。

「大切な、愛した人たちは皆去っていく。誰かを必要としたらその人達は私を虐げ始める。」

一息つくその様子は、ただの少女のそれとは違い恐怖を呼び起す。

さつきまでよりもより笑顔を広げて言う。

「君は違うと思ってたんだ。優しい、かつこよくはないかもしれないけど純粋な君は。」

「……」

「でもね、気づいたんだ。気づけたんだ。」

誰も口以外を動かさないと、異様に静かな不気味な雨の中。

「どうせ何も変わらない。皆一緒なんだよ、根本的に。」

「一緒……って……」

「信じちゃいけない、感情を凍らせて誰とも近づかなければいい。」

「

「そんなこと……」

「何も感じなければ悲しくない、孤独を苦しまなくていい。」

「そんな……こと……言っちゃ……」

「今までに苦しんだ分だけ早く、私は気づけたの。だから止めないで、ごめんね」

そう言うと彼女は、幕のような黒い雨の中を去っていく。

強さを増した雨は霧の中よりも、厚く視界を塞ぐ。

「まって、昌子さんっ！」

黒い雨に濡れた体で走り出す。要達はどうすべきか迷いながらも、あとを追っていきこうとした。

その瞬間、彼は倒れた。

「……………颯太っ!？」

要は慌てて駆け寄る。少年の少し厚手の上着は地面に溜まった黒い水を吸って変色し、顔も溜まったそれに浸かっている。

アルムも表情は変えず、しかし少し早足で近寄ってくる。

彼女の白銀の髪も濡れているが、色は変わることなく輝いている。要は昌子の去っていった方を一度見るが、見通すことはできず。

（今は追わない方がいい。）

そう判断した要は自分の上着を颯太にかけて、彼を抱えてビルの中へと走ってもどる。

黒い雨に濡れ、染まった三人はエントランスに倒れ込み息をつく。事情がよくわかっていない、いや理解出来ない様子のアルム。まともな電灯の無い薄暗いビルの中で三人の影が薄く拡がる。

「おい、颯太！しっかりしろ！」

肩をつかみ揺らされる。ガクガクと頭と身体が揺れて地面に打ち付けられる衝撃でか、数分で颯太は意識を取り戻す。

うつすらと目を開けて、すぐに気がついたのか飛ぶように起き上がり周囲を見回す。

「昌子さん……」

そう呟いた瞬間、うめき声をあげて頭を抱える。

特徴的な赤い短髪を無理に握り締め、齒と目を剥き出しにして唸る。

「ソウタ、大丈夫」

アルムが無表情ながらに声をかけるが反応しない。

それを見て要がまた肩をつかんで声をかける。

「おい颯太、しっかりしろ！」

だが呻きは止まらず、雨も止むことなく降り続けている。

足音は全く聞こえない。この雨を見てか、誰もいないのだろうか。地下と違い静寂に包まれた物寂しい、廃ビルのような風の壁に包まれた中。

少年の呻き声だけが深く反響していった。

深く。後悔と痛みをたたえて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7139x/>

---

獣の咆哮 -Roar-

2011年12月4日02時52分発行